



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第848回

あらためて日米関係を考える

R6/2/26

パネリスト：

及川幸久（作家）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

茂木誠（作家・予備校講師）

山口敬之（ジャーナリスト）

ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）※スカイプ出演

司会：水島総

水島「皆さん、こんばんは」

一同「(礼)」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第848回目になりました。大分、来ましたが、もうじきねえ、相撲取りの出場記録と同じように1000回に達成するんじゃないかっていうことすけ

ども、今日は『改めて日米関係を考える』というテーマです。これはアメリカを考えること、それから日本を考えることでもあります。日本の在り方を考える、日本人の在り方も考えるということも含めて、今日は、皆さん、自由な弁士というか、来るものが来るなら来てみる、矢でも鉄砲でも持って来いと言うような、こういう皆さんがお集り戴きましたんで、私も楽しみにしていますし、私も、そうありたいと思っていますので宜しくお願いします。本音でアメリカとの関係、或いは日本を考えてみたいと思います。それでは、ご出席の皆さんをご紹介致します。まず、作家の及川幸久さんです。宜しくお願いします」

及川「(礼)」

水島「作家で予備校講師の茂木誠さんです。宜しくお願いします」

茂木「宜しくお願いします」

水島「ジャーナリストの山口敬之さんです。宜しくお願いします」

山口「宜しくお願いします」

水島「室伏政策研究所代表、政策コンサルタントの室伏謙一さんです。宜しくお願いします」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授、ジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願い致します」

水島「そして、今日はスカイプのご出演でございます。エルドリッチ研究所代表のロバート・D・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「宜しくお願いします」

水島「今日は、こういうメンバーですから、日米関係、圧倒的になって感じで議論してみたいと思います。はい。早速ですけど、アメリカの大統領選挙、ご存じのように、この間、サウスカロライナで6対4ぐらいの割合ですけれどもトランプ大統領が勝ったと。まあ、あそこは地元ですから、全体を見ると色んな記録がありますけど75対17ぐらいの感じで共和党の中の支持率があると。

それでもヘイリーさんは、何処からか頼まれているのか粘りまくると。これからもやると言っている訳で誰が喜ぶか、みんなが考えれば判る事ですけれども、こういうような形で大統領選挙は動いています。

そして、もう一つは、バイデン大統領が御高齢だということで、様々なミスが目立つということで報道されていますけども、現実的にこういう話もあります。途中で本当に大統領選挙に入らないんじゃないかとか、オバマさんの奥様が出るのではないとか色んな話が出ております。確かに、バイデン大統領は高齢ですから、中々大変だろうっていうことがある。

ただ、このアメリカの大統領選挙が、世界の趨勢というか、そういうものを左右する大きな問題ですから、それに、もう一つは今迄、ずっとバイデン政権にべったり、くっついてきた岸田政権は、この行方も考えなきゃいけない。

そして、もう一つ、これは敢えて言わせて戴きますと、戦後保守の代表格と言われていた櫻井よしこさんが、『トランプになったら大変なことになる』と(失笑)。『台湾有事に、日本はウクライナになるんだ』って、その辺が、論理的に解らぬところがあるんですけども、そうおっしゃっていると。そして『ウクライナは、負けさせる訳にはいかない』と。物凄く張り切ってXに出しておりました。

これが、やっぱり戦後保守と言われる人達の現状が、そのこのところは、よく如実に出ているんだろうなあと思います。ただ、このまま行くものと同時に、もう一つ復興会議が行われまして米国のエマニュエル大使、私は総督って言っているんですけども、そのエマニュエル総督は日本の政府が1億500万

ドルを約束してくれたと。今年に入って、円に換算して587億7千万円が1月31日にウクライナに支払われたと。これは本当で、ウクライナからの説明があります。

そして、これも大事なことですけど、1月に関して他の国、アメリカもヨーロッパもお金を出してくれなかったと。日本だけが587億7千万円を出してくれたということを言っていました。

今回、日本政府は発表していませんけど、ただ、エマニュエルさんが具体数字を言っているので、結構、そこまで、そういうお金が出始めたのかと思いましたが、何か外務省は、デマだと。本当にエマニュエルさんに言っているのか、あんなっていうのがあるんですけども度胸がある人でしょうね。この外務省の役人さんの名前を知りたいと思うんですけども、こういうような状態があります。

それから、一時、評判になっていました、アメリカのバイデンも騒ぎましたしゼレンスキーも騒ぎましたけれどもナワリヌイさんですね。お亡くなりになりましたのは、つい、一昨日ですか、ウクライナの情報機関の長官、ブヌイって言ったかな、この方が映像の中で、皆さんは残念だろうけど血栓症で亡くなったんだと。こっちの方が何か危ない感じがするんですけどね。

こういうような形でゼレンスキー大統領と情報局の長官の言っていることが違うっていうことも明らかになって、その混乱なのか狙いなのか、ウクライナがやったのか色んな形の想像が出ています。

それから皆さん、ご存じのようにチャンネル桜はずっと、皆さんにウクライナ情勢をお知らせしてきましたけど、今、やっとメディアも段々、本当のことを伝えるようになって来ました。こんな状況を踏まえて、一説によると、岸田さんは6月頃に選挙を一発、やってみたいっていう望みも持っているっていう話もあります。まあ、どういふつもりか判りませんが、こういう中で日米関係は根本ですから、戦後79年やって来た、こういう関係が今、本当に音を立てて崩れようとしているのか支えようとしているのか、これも含めて皆さんと話し合ってみたいと思います。

ちょっと長くなりましたけれども、それでは、皆さんから、まず、ご自身が今、お考えになっている日米関係について、ご意見を伺ってから議論に入りたいと思います。じゃあ、及川さんから、お願いします」

及川「はい。日米関係ということで、まず、最初に私自身が考える基盤みたいなところを2点、お話ししたいと思います」

水島「はい」

及川「ただ、その前に、このテーマを議論するのに私自身のポジションっていうのを明確にしておいた方がいいかなと思います。私は日本で教育を受けて、日本の大学、そして、大学院を出て、そのあと、最初に社会人になって入った会社がアメリカのニューヨークのウォール街にある金融機関でした。メリルリンチという会社でした」

水島「ああ、有名ですね」

及川「ええ。ですから社会人として最初の一步を踏み出したのが、何故か、そういうアメリカの会社だったんですね」

水島「うん」

及川「そのあとに転職したのが、今度はイギリスのロンドンにある金融機関で、これは、投資顧問会社でインベスコっていう今でもあるはずですが、要は、私自身が社会に出て、最初に影響を受けた、職業訓練を受けた、仕事のやり方を覚えたのはアメリカとイギリスの会社、ニューヨークとロンドンだったんですよ。だから、ある意味で、私はアメリカとイギリスの両方とも心から愛する国であり、そこで得た影響っていうのは今から考えるとグローバルイズムですよ」

水島「うん」

及川「だから私自身の中に、かなりグローバリスト的な部分があるというのを前提に聞いて戴きたいんですが、その目から見ても、今のアメリカとイギリスは、あまりにもグローバリズムが酷いなというのが基本にあります。

一点目は、今、水島社長が話された内の一つのロシアの反体制派のナワリヌイの死亡の話ですね。これがロシア政府から発表になったのが2月16日ですから10日前ですよ。刑務所で死んだと。何で死んだのかってということに関しては色々な説があるんですけど、私自身が丁度、昨日、私のXのチャンネルで発信した動画ではイギリスの毒殺説っていうのを出しました」

水島「うん」

及川「これはギルバート・ドクトローっていう国籍が多分アメリカ人だと思うんですが、政治学者です」

水島「うん」

及川「アメリカの政治学者で、ただ、ベースにしているのは、今、ベルギーのブラッセルに居る人ですからアメリカとヨーロッパとロシアの関係の専門家な訳ですよ」

水島「うん」

及川「あくまでも、この人の説です。まあ何らかの情報を基にしているんでしょうけど、まず、これを進めたのはアメリカ、そして実行部隊はイギリスであると」

水島「うん」

及川「イギリスには色々な諜報機関がある訳ですよ。そことウクライナの諜報機関、この辺が組んでいて、特にウクライナの諜報機関っていうのは完璧なロシア語を話せる人材が居るっていうんですね」

水島「それは、そうですね」

及川「完璧なロシア語を話すスタッフが居て、そのウクライナの諜報機関のスタッフがロシアの国内で堂々と活動していると。その人達がイギリスの意向を受けて動いたってことですが、さっきもお話あったんですけど、確かに死因は塞栓症っていうんですね。あの管が詰まるっていう」

水島「はい」

及川「これは血管の中に外部から何か血液を通して色々なものが入って来て血栓だとか、細菌だとか空気だとか、それによって血管が詰まったり臓器が詰まったりという、まあ、一般的には、例えば、飛行機の中でのエコノミー症候群。こういうのが塞栓症にあたる。これで死んだって言う訳ですけど、塞栓症を促す化学薬品があるって言うんですね」

水島「うん」

及川「これを使っていると」

水島「うん」

及川「しかし、このナワリヌイっていうのはロシアの北部の辺境の刑務所の中にいる訳ですよ。それで、どうやってイギリスの諜報機関であろうとウクライナの諜報部員だろうと、そこに入るのかって、実は凄く簡単で、刑務所の中の他の受刑者に金を渡して、その塞栓症を促す化学薬品を刑務所の中で飲ませる」

水島「なるほどね」

及川「それをやったんじゃないかという説を流しているんですね」

水島「うん」

及川「勿論、証拠が出て来るはずがないので多分、今後も出て来ないと思うんですけど」

水島「うん、うん」

及川「一つの説に過ぎないんですが…」

水島「そうですね」

及川「ただ、状況証拠はある。まず、これは結局、プーチンの仕業にしたい訳ですよ。プーチンが殺したんだと。これは起きたのが2月16日ですよ。この前の週に、タッカー・カールソンがモスクワで、プーチンのインタビューをしている。これを3億人だか10億人だか判らないけど物凄く大勢の人が見ている」

水島「うん」

及川「その結果、何が起きたかと言うとプーチンのイメージが大幅に変わってしまった」

水島「うん」

及川「これをかき消す必要がある。だから、その直後に、これが行われている。それから2月16日に亡くなったという発表がロシア政府から出るんですけど同じタイミングで、ヨーロッパでは大きな会議があったんですね。これがミュンヘン安全保障会議っていうもので、毎年、この時期にミュンヘンで行われる安全保障の会議で、去年もそうですけど、ここにゼレンスキー大統領が来ている訳ですよ。

ゼレンスキーが来ていて、ゼレンスキーは前日に発表になったナワリヌイの死亡っていうのを当然、プーチンがやったんだと。だからプーチンっていうのは、とんでもない奴だっていう、もう自分の事しか考えてないということをして、非難する声明を出す訳です。それと同時に、このミュンヘンの安全保障会議に何故かナワリヌイの奥さんが来ているんですよ」

水島「はい、そうでしたね」

及川「奥さんが来ていて（失笑）、奥さんが、そこで、ちゃんと話すんですよ。このミュンヘン安全保障会議っていうところには、ヨーロッパのリーダー達が集まって来る。例えば、EU委員長のフォン・デア・ライエン。そのフォン・デア・ライエンが奥さんを迎えてハグして、本当に可哀想にということで、そういうシーンを映像で撮って、それをヨーロッパ、世界に流す。

これによってプーチンは何という残虐性があるんだっていうことを見事にPRしている訳ですね。そのあと、その奥さんは自分でも動画を出して、私は戦い続けるっていうことを言うんですけど、今度はバイデン大統領と会うんですよ。バイデン大統領は、その奥さんと会って、そのあと素晴らしい奥さんだと」

水島「うん」

及川「勇気があると。私は、この奥さんを支援する為にウクライナに何が何でも追加支援をする。そして、ロシアに対して追加の経済制裁をやろうと思いますと、ぶち上げる訳ですね」

水島「うん、そうでしたね」

及川「何かタイミングが物凄くいいんですよ。やっぱり、それぞれが物凄く同情している。ああ、可哀想だっていうことで」

水島「うん」

及川「これは、とにかくプーチンのイメージを改めて全て残虐だっていう風にもって行って最終的にアメリカの共和党が今、反対しているので中々追加予算が降りない訳ですが、このアメリカの議会に対して、こんなに酷いことが起きているのに未だに君達はプーチンを応援するのかっていうことを説得させる見事な口実になっているなど」

水島「うん」

及川「というのが、昨日、私が発信した動画だったんですが、正に裏で動いていたのは、イギリスですね。だけど、その裏に居たのは多分、アメリカであろうという推定です」

水島「うん」

及川「でも、そうなると、さっき言ったように、例えば、フォン・デア・ライエンというヨーロッパ、EUのトップが可哀想にと言って未亡人になってしまった奥さんを抱きしめている姿とか、こういうのは舞台の上の演技なのかということになる訳ですね。我々は、それをずっと見せられている訳ですよえ」

水島「うん」

及川「これは一体、何なんだろうと。この人達の共通の言語、共通のフレーズがあるんですよ。それは『民主主義を守れ』これを繰り返す訳ですよ。これをマントラのように繰り返すんですよ。『民主主義を守れ』と。それで、この『民主主義を守れ』というグループ、ここにアメリカ、イギリス、EU、そこにウクライナが入って来て、何故か岸田さんも入って来るんですよ」

水島「うん」

及川「岸田さんとか、何だっけ、あの女性の外務大臣」

水島「上川さんですね」

及川「ああ、上川さんという人も入って来ると。それで、みんなが『民主主義を守れ』っていうことを言っていると。これは明らかにプロパガンダですよえ」

水島「うん」

及川「プロパガンダっていうのは真実じゃないことを自分達の都合のいいように、人々に信じさせるっていうプロパガンダで、プロパガンダをやるのは民主主義じゃない側がやる手だけど、このプロパガンダをやっているってことは正に、あのジョージ・オーウェルの『1984』が現代に実現しているんだろうなと」

水島「うん」

及川「何か、この3年間ぐらい、こんなのばかり、ずうっと見せられていて、私は個人的にも、ほとんど辟易しているんですけど、『1984』正に核戦争が世界中で起きて世界中の国々が無くなって残った国が3つしかなくて、その3つの国は、全部、全体主義になっている。その全体主義の国がやることっていうのはプロパガンダですよえ」

水島「うん」

及川「今、この本の通りになっているんだろうなと。ということは、その中心にあるアメリカは全体主義の国であって、もう、決して民主主義の国じゃない。そのアメリカと今でも一生懸命、同盟を組んでいる我々日本も全体主義になるんだろうなっていう、これが、1点目の懸念です」

水島「なるほどね。はい」

及川「もう1点だけ言わせて戴くと」

水島「はい」

及川「その中心に居るのはバイデン政権のアメリカですよえ」

水島「はい」

及川「私は今、YouTube をやっていませんけど、YouTube をやっている時から、国際情勢で今、何が起きているかということを毎回、取り扱っていました」

水島「うん」

及川「今、何が起きているのか何が問題なのかと言うと、私の個人的な表現をさせて戴くとすると、バイデン政権の傲慢さが起きているという風に思います。このバイデン政権の傲慢さっていうのが、この世界の一番の問題なのかなと。最初に私が日本で大学と大学院を出て、アメリカに行きましたっていうことを申し上げたんですけど、大学院は、東京の三鷹にある国際基督教大学っていう大学の大学院に行っておりまして、そこでキリスト教神学と宗教学を専攻していたんですね。ちょっと変わり種ですけど、その時に、私が研究課題にしていたのがアメリカの20世紀最大の神学者と言われたラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）という人です。

ラインホルド・ニーバーっていうのは神学者ですけど、政治に物凄く影響を与えた人で、アメリカの政界にはニーバーのファンが多いんですよ。ニーバーリアンとかって言われています。実際、ニーバーはホワイトハウスで大統領のアドバイザーもやっているんですよ。特に外交関係のアドバイザーをやっている。だから、ニーバーが日本にも少し関わっているんですけど、このニーバーが専門としていたのが社会倫理学、勿論、キリスト教の牧師ですから、キリスト教の観点から、宗教的な観点からの社会倫理学。

ここでニーバーが常に言っていたのは民主主義の国であったとしても、その国の傲慢さが出た時、このニーバーは、この傲慢を英語でプライドという言葉を使っているんですけど、まあ、プライドですね。良い意味で言ったら誇りかもしれないけど、今日はアメリカの方が二人居るんだけど、このニーバーのプライドっていうのは傲慢って訳していいのかなとか、あとで聞きたいですけど…」

モーガン「はい」

及川「ニーバーは、このプライドが問題だと。これは保守であろうとリベラルであろうと何であろうと、結局、アメリカが世界の悪だとか苦しみだとかを全て救えるんだという、とんでもない信念を持ってしまうとプライド、傲慢になると。実は、これが一番、危険だということを20世紀のニーバーが言っていて、私は大学院の時、そうなのかなあと思っていたんですけど、今になってみると、このニーバーの予言が現実になっているなあというのを感じております」

水島「なるほど」

及川「はい、以上です」

水島「はい、有難うございます。では、茂木さん、お願いします」

茂木「はい。先に本の紹介をしても宜しいですか」

水島「うん。どうぞ」

茂木「この番組にも、よくご出演されていらっしゃる宇山卓栄先生との対談っていう形で…」

水島「ああ、コラボですね、はい」

茂木「『世界史の原理』というテーマで、最近のプーチンへのカールソンのインタビューでも、よく解りますけれども、実は世界観っていうのは各文明によって全く違うということですよ」

水島「うん」

茂木「うん。我々は欧米型の自由と民主主義が正しいという風に、ずうっと教育されていたけど、そうじゃないと。イスラムにはイスラムの正義があって、中国には中国の正義があって、ロシアにはロシアのということで、世界の多様性、その中で日本文明っていうものが、どういう価値観を築いて来たのかっていうことを纏めた本でございます。

先程の及川さんの問題提起に引き継いで行きますと、ナワリヌイ夫人が非常に、もてはやされているってことを聞いて、あっ、あの宋美齡、蒋介石夫人の宋美齡ですねえ」

水島「ああ、三姉妹のあれですね」

茂木「可哀想な中国っていうことを盛んに訴えて、アメリカを巡業して、多くの人の涙を誘って、日本に対する開戦意識を高めたっていうことで、実は、もう当時から、全く同じことをやっている訳で、アメリカの常套手段を未だやっているなっていう風に思いましたね。皆さんはナワリヌイっていう人について殆ど知らないんですけども、あの人は、元々は極右ですね」

水島「そうですね」

茂木「はい。ロシアの栄光を言っていた人で、だからジリノフスキーっていうのが居ましたけど」

水島「うん、昔、居ましたね」

茂木「要するに、あのグループですよ」

水島「そうですね」

茂木「うん」

水島「本当の極右ですよ」

茂木「うん、そうですね」

水島「はい」

茂木「但し、そのプーチン政権に対する批判を始めた為に睨まれて反体制に寝返ったということだったんですけども、支持が中々広まらないっていうところで恐らくは、ある段階で外国の支援を受けたんでしょうね」

水島「うん」

茂木「ウクライナの親オービ派とか、或いは、ジョージアの親オービ派と同じような文脈でプーチンに替わる政権っていうことで担がれたパペットだと、私は見えています」

水島「はい」

茂木「ウクライナについて言うと、最高司令官が解任されていますよね」

水島「そうですね」

茂木「ザルジニーっていう人で、実は、大統領のゼレンスキーよりも人気のあった人ですよ」

水島「うん」

茂木「うん。ザルジニーは、これ以上、続けても、もう勝ち目がないと」

水島「うん」

茂木「負けていることを認めるべきだと言い出した人で、それで解任されました。ということは、今、大統領は、もう現実を見たくないということになっていると思います。私も本当に彼が自分で戦争したがっているかどうかは、よく分らないですね」

水島「うん」

茂木「いやいやさせられているのかもしれないし。だから、これから起こる事っていうのはアメリカの大統領選挙の結果次第ですが、仮にトランプになった場合、もうウクライナ支援が止まりますよね。そ

うすると、ゼレンスキーは、いやいやながら停戦のテーブルにつくか、或いは失脚するか、或いは消されるかという風なことになると思います」

水島「うん」

茂木「今日のテーマはアメリカですけども、アメリカっていう国の今の病状を思う時に、やはりアメリカの建国から始まらなきゃいけないと思うんですね。それは、キリスト教のプロテスタントのかなり過激な人達が創った国ですよ。ですから、さっきの及川先生の神学の面からも、アメリカ文明を分析しないと、ただ安全保障だけでは、アメリカっていうことは語れないという風に思いますので、今日はとても楽しみです」

水島「そうですね」

茂木「はい」

水島「今、丁度、茂木さんに言って戴いたナワリヌイは、本当に民主主義と何かの旗振り役みたいに思われていますけど騎士でも何でもありませんから本当にジリノフスキーと立った極右の人で、ユダヤやロマや色んなソ連国内に居た他民族を排除しようというような人だった訳です。

それが、いつの間にか民主主義の代表みたいな反体制派の代表になっていましたけど、これも踏まえておいた方がいいと思いますね。似ているのが、実はゼレンスキーもそうですね。こういうようなことで、先程、プロパガンダって及川さんが言っていたけど、これが本当に繰り返されている。

私は昔、ずっとシナリオライターをやっていたから解るんだけど、サスペンスでは、誰が得をしたかって言ったら、犯人が一発で判るのに、あまりにも単純な構図を作ったなあと思ってね。それも一番、これからプーチンが大統領選に出る時に、そんな、反体制派の奴を殺すようなことをやる必要はないんでね。これは、もう誰が考えても解るはずですけど、でも、意外と日本のメディアは、そういう形になっていますね。単純に受け取っているみたい人が多いと思います。では、山口さん、お願いします」

山口「はい。及川さんがアメリカ、イギリスで社会に出られたっていうことですが、私はTBSという非常に悪い会社に入って…」

一同「(笑)」

山口「最初の赴任がロンドンだったんですね」

水島「はい」

及川「丁度、逆ですね」

山口「逆ですね。そのあと何年か経ってオバマ政権の時にワシントン支局に参りました。ただ、私は仕事としてではなくて観察者として英米に居たので、グローバリズムについては徹頭徹尾、批判的な立場ですが、及川先生、茂木先生も、今日、いらっしゃる4先生の世界史的視点については殆ど全く齟齬が無いだろうなと」

水島「うん、うん、まあ、そんな感じですね」

山口「同じ方向を見て、お話が出来るんだろうということで、逆に勉強させて戴きたいなと思っているところです。そして、私はロンドンに居た時にウクライナに12回、入っているんですね」

水島「ああ～」

山口「それでロシアは、もっとカバーエリアだったので、その時に覚えているのは、まずナワリヌイっていう人はヤブロコという政党に所属していたんですね」

水島「ああ」

山口「これロシア語で、りんごっていう名前ですけど、完全に自由主義インターナショナルに所属するアメリカとイギリスの似非民主主義でアングロサクソンに対抗する国を崩壊させる為の入り口となっている、そういう政党が世界中に埋め込まれている訳ですね」

水島「うんうん、うん」

山口「そのうちの一つがヤブプロコで当時は反エリツィンを掲げていた。そのあと、反プーチンになっていくんですね。このナワリヌイっていう人は、もう一つ重要なキャリアとしてはイエール大学の奨学生だということです」

一同「う～ん…」

山口「イエール大学から奨学金を貰っている人です」

水島「うん」

山口「アメリカっていうのは常に民主主義を世界に広めるといふ美名の下で世界中に混乱と分断と憎悪と殺戮を植え付ける。これが彼らの業務な訳ですね。CIAとか。そういう意味に於いてナワリヌイが、このタイミングで死んで、何故、妻がアメリカに居るんだよと。それは出来過ぎという意味に於いては及川先生、茂木先生がおっしゃる意味に於いて、これを日本の新聞が反プーチンの旗手みたいな形で持ち上げている」

水島「うん」

山口「ところが彼はロシアでネオナチとの関係を疑われて訴追されたことがある人物です」

水島「そうですね」

山口「ということは、ウクライナにアゾフ大隊があるって言って、この番組でも大喧嘩になったことがありましたけども、世の中にはアメリカの悪意っていうのを隠蔽しようとするシステムがあって、日本の大手メディアも、それに乗っかっちゃっているんだということが、私は今回の日米関係を考えた場合、まず、私達の目が曇らされているんだと。システムとして曇らされているんだと。その曇った眼鏡をはずさない限り、日米関係は全く見えない」

水島「うん」

山口「しかも、今、日本とアメリカは独立国として向き合う形になっていませんね。アメリカがそもそも分断されてしまっている。それは最早、共和党と民主党という左右の分断では全く無くて」

水島「うん」

山口「その背後に居る選挙も経ていない第一次世界大戦後に構築された非常に不透明な、まあ、私達が共通の敵と思っているグループにバイデンが牛耳られている。共和党の一部も、その勢力に牛耳られている。それと、それはおかしいよねと。アメリカの未来はアメリカで決めなきゃいけないよねという、まあ、トランプとかロバート・ケネディ・ジュニアとか、所謂、選挙を経ない超国家組織に抗っていきこうという分断の方が、よっぽど深刻になっているということが解らない限り、日米関係なんて今、存在しないんですね。だって岸田っていうのはアメリカに隷属しているから関係じゃないんですね」

水島「うん」

山口「もうアメリカの一部になっちゃっている。ただ、アメリカの、どっちの一部に従属しているのかということが、今日の議論の本質であって欲しいなと、そのように思っています」

水島「そうですね。先程、言った櫻井さんの問題もそういうところですけどね」

山口「そういうことですね」

水島「丁度、今、ナワリヌイの話もそうですけど、これ、一昨日ですかイギリスの前首相の、女性の方、何て言ったかな」

山口「リズ・トラス」

水島「うん。その人がディープ・ステートっていう言葉を使った」

山口「あれはシーパック。正に、アメリカの共和党の最大の支持母体であるシーパックの会議に、辞めさせられた、49日で首相をクビになったリズ・トラスがハッキリ爆弾発言をしたんですね」

水島「そうですね」

山口「あれは大変、大きな…」

水島「だからトランプも一回、使ったんですけどディープ・ステートっていうのを今回、イギリスの前首相が平気で使っちゃったと。非難覚悟だった。だから、よっぽど45日ぐらいですか」

山口「はい、49日ですね」

水島「何だか理由が解らないけど、経済政策が拙かったからってクビになったけど、他に理由は勿論、あるんですけども、やっぱり、今、そこなんでしょうね」

及川「リズ・トラスが言っていたのは、自分はイギリスの首相になったら色んな事が決められると思ったら、決めるのは首相の私じゃなくてイングランド銀行だったっていう」

水島「そうね。そういうことですよ」

及川「そっちが決めてるんだっていうのが判ったっていう、それをバラしちゃった訳ですよ」

水島「そうですね」

山口「ということは及川さんと私が若い頃に居たイギリスとアメリカっていうのは、実はそこにある政府というのは表向きの政府であって、その背後にリーダーを簡単に取っ替えることが出来る勢力が居て、実は裏でくっついている訳ですね」

水島「そうですね」

山口「これはチャタムハウスがあってCFRがあるのと同じで、そのことを日米関係を考える時の議論のベースにしない限り、もう世界は見えてこないと思うんですね」

水島「いや、そうですよ。今日は、そういう意味で集まって戴いたのも、そういうことが解っている方に集まって貰おうっていうことで…」

一同「(笑)」

水島「誠に観ている方は本当に明解にお解り戴くことがあるんじゃないかっていうこともあると思います。はい、有難うございます。じゃあ、室伏さん、お願いします」

室伏「はい。皆さんから明解なお話があった上で、私は何を喋ろうかという風に色々と考えていたんですけど(笑)まずナワリヌイに関して、やはり、皆さん、よく判っていらっしゃるのは良かったなと思って、もう観た瞬間に、私が一番、最初に思い浮かんだのは、凄い昔に遡りますけど、米西戦争の時のメイン号事件ですね」

一同「ああ～」

室伏「あれって未だに原因が判っていないじゃないですか。でも、あれをきっかけとして米西戦争になって、スペイン領を取って行ったと。要はアメリカって必ず、そういうものを使う訳ですよ。真珠湾もそうですしCOIN作戦とかでもありますし、あと9.11もそうですけども、だから、それに使っ

たのと、何故かと言うと、先程、及川さんにおっしゃって戴いた通り、あまりにもタイミングが良過ぎると。

私は日本のメディアを観ないんですよ、もう下らないので。嘘ばかりついているので。海外メディア、それでも未だいいので海外メディアを観ているんですけど、そうすると、堂々と報道された翌日ですよ。例えばバイデンがプーチンが悪いって。プーチン、プーチンとやる訳ですよ。何を証拠に言っ
とるんじゃと」

水島「う〜ん」

室伏「デイビッド・キャメロンですよ。今、外務大臣やっていますけど、彼もプーチンが悪いと」

水島「うん」

室伏「何を根拠に言っているんですかって普通、おかしいと思うじゃないですか。そしてヨーロッパの主要都市で本当に雨後の筈のように反プーチン・デモが起きる」

水島「うん」

室伏「綺麗な何方かに作って戴いたような、しっかり印刷したプラカードを持ってやる訳ですよ。どう考えても、いつものパターンだなんていう風に思うのが当然だと思うんですけど、何故か日本だとプーチンが悪いという話になって、もっと日本は支援をしなきゃいけないっていうことになって、日本はバイデンの暗証番号とカードを入れずに勝手にお金が出て来るATMでありますから…」

一同「(失笑)」

室伏「そういう立場を演じているという風なね、今、そんな状況になっているんですけど、海外メディアでは、そういう話があるとか、あと、私が驚いたのは先程から出ているミュンヘン安全保障会議ですよ。まあ、あそこでね、ナワリヌイの奥さんが出て来たのはタイミングが良過ぎるし、彼女の動画というのも、あまりにもちゃんとスタジオでプロが撮っていますから、誰がやったんだよっていうことを冷静に考えれば直ぐ判るじゃないですか。

だけど素晴らしいとか何かね、我々は、とかっていう風になるのが本当に、どうしようもないなと思うんですが、ドイツのデーダブリューっていう公共放送がありますよね。あそこのインタビューがあつて、安全保障会議に参加している各国の首脳と言うよりも専門家に対するインタビューがあるんですね。中国人って、よくもこうやって上手く答えるなあと思っていたんですけど、アメリカの元軍人です。将官クラスだと思いますけど、その方に対するインタビュー、その方も出席しているんですけど、その方が何と言ったかと」

水島「うん」

室伏「私は本当に強烈だった印象だったのは、はっきりとロシアをディフィートすることは、アメリカの国益だと」

山口「そうですね」

水島「うんうん、うんうん」

室伏「ああ、これ、完全にロシアを潰そうとしているじゃないかということ、へらっと、その人が言っちゃったんですよ。これは日本で全然、報じられていないんですけど、だから、結局、このタイミングでナワリヌイの奥さんと呼んだりとか、ハッキリ言って、あの人は殺してっていうのは、もう完全に今、ウクライナ情勢が、もうボロボロで、ハッキリ言って負けている状況ですから、その状況を国際的な世論として何とか逆転する為の手法としてね、まあ、これ、アメリカは、よく使いますけど…」

水島「うん」

室伏「アメリカ国内だと、また、やりやがったって思っている人が居ると思うんですけど、日本は見事に乗せられてしまっているなあと。私が驚いたのは、そこに僕のインカレサークルの先輩達とかも関わっているの、あまり個人名は出したくないんですけど、今のウクライナ紛争の戦局を改善する為には、榴弾砲の数を決めてと言っていたんですね。榴弾砲、要するに玉の数だった訳ですよ。(笑)

水島「うん」

室伏「これは軍事の専門家じゃなくて、軍事の素人でも、いや、それは関係ないでしょと。別に雪合戦をやっている訳じゃないんですから」

一同「(笑)」

室伏「だから、日本のその分野の専門家と学者さんと言われている方が、その話を堂々として、しかも、それをネットメディアで、まあ、何処とは言いませんけど、ご覧戴ければ判ると思うんですけど。そういうところが報じるっていうね」

水島「うん」

室伏「まあ、なんと日本というのは平和ボケという以前に、本当に何だろかな、幼稚園児というか、もう保育器の中に居る赤ちゃんみたいな状況だってことを思い知らされたところがあって、だから、それが先程、山口さんのおっしゃっていた通り、もう日米関係じゃないんだと。関係すらなっていないんだっていうことを象徴しているのかなあと。すみません、ちょっと色んな現象面からお話を申し上げたんですけど、そういうことなのかなあという風に思ったところであります」

水島「うん」

室伏「その上で私の立場なので、ちょっと日本側の話で申し上げれば、今回のウクライナ紛争で自動的に金を出すATMの役割を演じるというか、そういうこともあるんですけども、それ以前から、ずっと長いスパンで、敢えて日米関係と言いますが、それを振り返ってみると、はっきり言えば、無用の事、日本にとって全く必要が無いことを、アメリカの要求に唯々諾々と従って、受け入れて、そして自らは衰退して日本を破壊してきてしまったという風な状況かなと」

水島「そうですね」

室伏「直近で言えば、これから10年後にはどうなるか分からないと思うので、ひとつ、申し上げれば食糧ですよ。アメリカは入れる必要なんか全く無い」

水島「うん」

室伏「だって自国で作っている訳ですから」

水島「うん」

室伏「それなのに態々アメリカから入れるということをやりましたと。そんなもの、別に交渉すればいいし、受け入れざるを得なかったとしても、何とか、その数を制限するとかね。これは発展途上国でもやっている訳ですよ。何とか交渉して。それなのに、それもせずに唯々諾々と買います、買いますと」

水島「うん」

室伏「しかも、まあ、お肉ですね。その畜産で使っている」

水島「はい」

室伏「要は、そのホルモン剤の話とか農薬の話とか、アメリカの要求通りに、どんどん、どんどん規制を緩和するっていうことをやってしまった。これは誰の為ですかって言ったら、当然、日本の為では無い訳ですけど、アメリカ政府の為っていうよりも特定企業の為じゃないですか。

だから繰り返しになりますが、日本というのは山口さんがおっしゃった通り、もう関係ではないというのは、何て言ったらいいんでしょうねえ、もうねえ、国の体を成してない」

水島「うん。本当に成してないですね」

室伏「日本の事を考えていない」

水島「うん」

室伏「そして日本を破壊してきた。それにも拘らず大手メディアが嘘を流し、それに対して、アメリカであれば大手メディアを信じるといふ風な人は大体3割ぐらいと聞いていますけど、日本って、かなり高い訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「そうやって日本人自らが、それを招いてしまったと。選挙に行かないとか、日米は、まあ、ハッキリ言うと同盟じゃないじゃないですか、あんなもんって」

水島「うん」

室伏「だから、ただの使いっ走りですよ」

水島「うん」

室伏「いやね、もう言っていけばキリがないんですけど。だから、その関係というのを、元の状態に戻すのは難しいんですけど、少なくとも、まずは意識のレベルから反転攻勢というか逆回転させていかないと、本当に日本がアメリカの従属国だとか保護領だって以前に、本当に、この国は無くなっちゃいますよ」

水島「うん。そうですね」

室伏「だから僕は今回のナワリヌイの話とか、あとは、ウクライナ情勢、まあ、それへのアメリカの対応って言いますか、アメリカの関与の話とか、その日本の対応っていうものを、やはり逆回転、反転攻勢する」

水島「うん」

室伏「そのきっかけに、少なくとも、そういう意識を、国民の間に醸成する機会に出来ればなあという風に思っております」

水島「そうですねえ。はい。有難うございます。ではジェイソン・モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。いつも誘って戴いて有難うございます。先程、室伏先生がおっしゃった通りに日米関係では無い事について、私は全く同感で。この2年間、私は猛反省しております。ウクライナ戦争が勃発する以前、私は堂々と軽率に日米同盟とか日米関係を繰り返して言っていたんですけどもウクライナ戦争のお陰で日米関係、日米同盟とは何かと解るようになった気が致します。

私も拝米新聞とか拝米メディア、拝米保守とかをよく批判していますが、ただただ物事が解っていないなあと思っていたんですけども最近、いや、そうではなくて、そのような人は居るんですけども、そうではなくて、敢えて嘘をばら撒いている人間も居るなあと思うようになりました」

水島「うん」

モーガン「ウクライナっていう詐欺は、先程、室伏先生がおっしゃった通り、米軍の人々は堂々とね、プーチンを降伏することがアメリカの国益そのものであると言っている訳です」

水島「うん」

モーガン「日本国内でも、その来たる戦争に日本を巻き込もうとしている人物は居ます。それは、ただ物事を分っていないからではなくて、敢えてそれを狙っている訳です」

水島「うん」

モーガン「何処から入ろうかと考えていたんですけども、先日、私は国会まで行って、同僚と一緒に鈴木宗男先生と、取材という意味でインタビューをさせて戴きました。鈴木先生がおっしゃっている事は、私にとっては非常に面白いと言うか重要なことをおっしゃっていると思います。

ただ昨日、NHKで観たプロパガンダですけども、ウクライナ戦争に関する純粋なプロパガンダがありました。ジャーナリストとしては、普通に考えれば両側に聞くことが基本じゃないですか。ウクライナばかりじゃなくて、例えば、9.11のあとビンラディンの所まで行ってインタビューする人さえ居た訳です」

水島「うん」

モーガン「でもロシア側の言い分を一切、取り上げないことがあまりにもおかしいです。私が鈴木宗男先生のインタビューの内容を、日本国内の、所謂、私が言う拝米メディアにこのインタビューをどうですかと打診すると門前払いです。ロシア人が言っていることを聞く価値が無いと、もっぱら門前払いで」

水島「う～ん」

モーガン「もうロシア人が言っている事は一切、載せない。それは、ジャーナリズムの失格って言われますね。情報統制ですね。ウクライナっていう戦争はどのような戦争かっていうことになりますと、昨日のニューヨークタイムズですよ」

水島「はい」

モーガン「ニューヨークタイムズっていうプロパガンダ紙が『The Spy war how does CIA secretly helps Ukraine fight Putin, February 25, 2024』ニューヨークタイムズでさえ10年前からCIAがウクライナのインテリジェンスと協力していて、今になってもロシアとの戦争に協力しているという長い記事があったんですよ。是非、読んでみて下さい」

水島「うん」

モーガン「誰が戦争を仕掛けたのかと。この記事を読めば、よく解ると思うんですけどもアメリカ・メディア、ニューヨークタイムズでさえ、やっと本当のことを報道しようというようになっているんですけども、日本の拝米メディアは、今日の拝米タイムズを買って来たんですけど日本の拝米タイムズは…」

一同「(苦笑)」

モーガン「未だにG7ウクライナとか支援の継続とかプロパガンダを推し推しで、先程、及川先生がおっしゃったこと、舞台の上の演技、その未亡人とバイデンとの気持ち悪い抱きしめシーンを見て、これは本当にお粗末なプロパガンダだなあと感じました。舞台の上の演技はイコール民主主義だと思いますよ。イコール、アメリカン・デモクラシー。日本国内の拝米保守、まあ、全員、売国奴ですけどもね」

水島「はい」

モーガン「未だにアメリカン・デモクラシーを推している人、ウクライナ戦争を推している人は多分、詐欺師ですね。日本はどのような役割を果たしているかというと、先程、山口先生のお話を拝聴して思ったんですけども、日本はアメリカの陰謀ロンダリングをしている訳です」

山口「(頷く)」

モーガン「アメリカが嫌なことをやって、日本がそれを取り上げて、良かったなあと、デモクラシーの為だと。そういう役割を果たしていると思います。ナワリヌイさんは、米西戦争と Remember the Maine とか、それは非常にいいと思いました。私は、それを見て Nord Stream 2 を思い出した。人間版ノードストリーム2ですね。C I A がやって、それをロシアのせいにする」

水島「うん、うん」

モーガン「でも、先程、水島社長がおっしゃったように、何故、プーチンが選挙の前に、わざと自分の揚げ足を取るかのような感じでナワリヌイさんを暗殺するか。だって刑務所に、もう入っているじゃないですか。殺す必要は全くゼロです。逆に自分の不利ばかりになるのでプーチンはそんな馬鹿じゃないと思います。もう揉米メディアとか揉米保守っていうのを、私は完全に諦めていますので、直接、日本の国民に訴えたいと思います」

水島「うん」

モーガン「どういう国と付き合っているのか。貴方の政府はどういう国と付き合っているのか、ちょっと説明させて戴ければと思います。『切り捨て御免』2年前の事件かと思うんですけども、敢えて名前は言いませんが米軍の将官が交通事故を起こして二人が亡くなった訳ですね。まあ、曖昧なことと言いますか、私は、誰が悪いかということまで判っていないですが、要は、あの方のせいで日本国民2名が亡くなった訳です」

水島「うん」

モーガン「当然、日本の刑務所に入ったけれど、アメリカが圧力をかけてアメリカの刑務所に入る。結局のところ、もう釈放されている訳です。それは、『切り捨て御免』日本人を殺しても大丈夫ですよ。日本人を殺してもいいよ。何の効果も来ないですよ」

水島「うん」

モーガン「どういう風に日米同盟の奴らが日本国民を見ているのか。ただの家畜ですよ。いくら死んでも構わない。次のウクライナが日本だと言われているんですけども、そうなったら今のウクライナみたいに何十万人が死んでもトップの人々は構わない。そのようなサイコパス、死の文化、死のカルトに入っている訳です」

水島「うん」

モーガン「Joshua Wong。これは報道されていなかったような気がしますけれどもジョシュア・ウォンっていう香港の民主化活動家ですね」

水島「はい」

モーガン「まあ、勇気のある若い方です。実は、この方がマイク・ポンペオ (Mike Pompeo) 国務長官に亡命させて下さいと要請したら黙殺です。マイク・ポンペオという人はね、私はデモクラシーの為に戦っている。私は民主主義の仲間ですと言うんですけど、本当に命を懸けて民主主義の為に最前線で戦っている方が亡命させて下さいと言ったら、いや、中国が怖いから残念と。このジョシュア・ウォンは今、香港の刑務所に入っています。まあ、中国の刑務所かもしれないし、何処にいらっしゃるか分からないんですけども、これは日本の例えになるんじゃないですか」

水島「そうですね」

モーガン「このジョシュア・ウォンは、あのアメリカに見捨てられるんですよ。Todd and Krista Kolstad, Montana。前回、これを紹介させて戴いたんですけども、モンタナ州っていう西部の州の一般国民で、娘さんが中学校で虐めを受けていて、スクール・カウンセラーとの話の中で、私が男の子だったら、こうやって虐められていないかもしれないよという発言をしたら、あっ、トラスジェンダーだ

と、スクール・カウンセラーが診断して、貴方は男の子にならなければならないとプレッシャーをかけて、結局、この両親は親権を失いました」

水島「うん」

モーガン「娘さんが政府に拉致されたんですよ。そういう政府になっているんです。アメリカ政府は完全にファシストな政府になっています。私の大好きな『American Conservative』という雑誌があるんですけども、これが一番、新しい号です。『The American Conservative, our LGBT Empire』と書いています。『our LGBT Empire』。ウクライナでは何をやっているかっていう非常に鋭い観察が書いてあるんです。

『Helen Andrews』という大好きな保守系の女性ですけども、私達は結局、ウクライナでLGBTを推す為にあそこで干渉しているんじゃないですかと。アメリカ帝国は、結局、全世界を虹色にする為に抗争しているんですよ。日本国内の様子を見れば、よく解ると思うんですけども、正にそうです。

総督府は何の為に日本に来ているのかっていうと、ひとつ目は誰かの暗殺を担当する為。それが一つですね。もう、その作業は済みです。もう一つの仕事は、この日本文化をぶっ壊す為に来ている訳です。LGBT何とかは一端に過ぎないです。『El País & the CIA』、『El País』ってスペインの新聞です。国という意味ですね。『El País と CIA』。

El País という新聞が数か月前に報道したのは、スペインの会社がCIAと共にアメリカの弁護士とジャーナリスト達に訴訟を起こされたんです。裁判に訴えられたみたいですよ。日本国内では、この報道を一切、見ていないんですけども、先程、申し上げたマイク・ポンペオっていう人が色々訴訟を受けている訳です。

マイク・ポンペオとCIAは何をやったかって言うと、アサーンジ。ジュリアン・アサーンジ、ウィキリークスの人がロンドンのエクアドルの大使館に入っていたじゃないですか。ジャーナリストとか弁護士がアサーンジ氏と会う時に、CIAは、その話を、どうしても聞きたいじゃないですか」

水島「うん、うん」

モーガン「CIAがスペインの会社を雇って、スペインの会社が大使館で何かIT関係の仕事をやっているって装って、実はCIAの為に探知機とかカメラとかを設置する訳です。それを知ったアメリカの弁護士がCIAに対して訴えた訳です。何故、ニュースになっているかって言うと、去年の終わり12月ぐらいだと思うんですが、裁判官が、その訴訟を認めた訳です。ほぼ前例が無いですよ。CIAに対して訴訟を立てたら、それは却下ですね。アメリカのインテリジェンスの関係、マル秘情報が漏洩しますんで門前払いですけども、裁判官が認めた訳です」

水島「うん」

モーガン「つまりマイク・ポンペオという人がCIAの誰かが裁判所に入って、裁判にかけられる訳です。これは画期的なことですよ。つまり裁判官でさえ、これはおかしいと分かっています」

水島「うん」

モーガン「アメリカの帝国です。『Police State』。お勧めのドキュメンタリーです。Dinesh D' Souza 私の大好きな保守系の評論家です。『Police State』という映画がございます。『Police State』とは警察国家ですね。このディネッシュ・デスーザという人はインドからアメリカに移民した訳です」

水島「うん」

モーガン「アメリカが完全に警察国家になったという証拠を出すドキュメンタリーです。アメリカ政府はどのような政府なのかということを知らせてくれる映画です。『Reminiscent of Soviet Russia-Mollie Hemingway』 今月の12日、国会で、この発言をしました。どういう意味かって言うと、ソ連が国民を

監視していた。国民にプロパガンダをばら撒いていたかのように、アメリカ政府が前のソ連と同じようなことをやっていますよと。

保守系のジャーナリスト、モーリー・ヘミングウェイが言いましたけれども、非常に聡明な方で、私のジャーナリズムも影響を受けています。ウズベティ・ヘリッチというFOXニュースのジャーナリストが急に首になってCBSニュースは、彼女のタブレットとかパソコンを取り上げて、彼女が取材していたメモとかは全部、CBSニュースが没収している訳です。もしかしたら政府に不都合な報道をしようとしたじゃないですか。まあ、シェリル・アトキンソンもそうでしたけれども」

水島「うん」

モーガン「色んなジャーナリストが、このような扱いを受けています」

水島「うん」

モーガン「これは『自由と民主主義』と言うんですね」

水島「うん」

モーガン「これは『自由と民主主義』、『Joan Bell』74歳。中絶に反対して、連邦政府が訴訟をかけて、これから11年間、懲役です。74歳の女性が、これから刑務所に入る」

水島「うん」

モーガン「その罪は中絶に反対したからです。私の友人もそうです。拝米保守は、私に電話して戴きたい。何故、米政府を支持しているんですかと、私に、その説明をして戴きたいと思います」

水島「うん」

モーガン「誰でもいいですよ。メールでもいいですし、研究室まで来て下さい。説明して戴きたい」

水島「うん」

モーガン「私は、何故、74歳のお婆さんを刑務所の中に入れていた政府を支持しているのかということの説明をして戴きたい。それはウイグルのジェノサイドと、どう違うんですか」

水島「うん、うん」

モーガン「中国を批判するんですけれども何故、ワシントンに批判しないんですか。それは、おかしいですよ。誰から、幾らを貰っているのか、その説明もして戴きたいですね」

水島「うん」

モーガン「『Ai Weiwei (艾未未)』中国の美術家。今のアメリカは、私のお父さんが経験した毛沢東の中国と変わらないと、最近、言っていますよ。Ai Weiwei (艾未未) っていう、中国の超有名な方ですけれども他の中国人も同じことを言っているんですよ」

水島「うん」

モーガン「アメリカに住んでいる中国人です。今のワシントンは今の北京と変わらない。艾未未っていう人も言っているんですよ。トランプ政権の時、ピーター・ナバロは、国家中小会議委員長でしたね。この人が刑務所に入るんですよ。刑務所に入ります。議会侮辱罪ですか」

水島「う〜ん…」

モーガン「こういう、とんでもない、でっち上げの犯罪をもって、この人はトランプ側近の人物です。この人が、これから刑務所に入るんですよ」

水島「うん」

モーガン「それは警察国家、ファシストの国です。最後です」

水島「うん」

モーガン「『You have been lied to.』日本国民に直接、訴えたいです。『You have been lied to.』例えば保守メディアだけではなくて、メディア全体、政治家。あなた方に嘘をついているんですよ」

水島「うん」

モーガン「皆さん、お解りと思うんですけども『You have been lied to.』本当のことが聞きたいと思ったらチャンネル桜しかないじゃないですか。これは国の宝物ですよ」

水島「うん」

モーガン「本当に、これが最後ですけども、私の国と貴方の国の政府が協力して、私に対しても貴方に対しても嘘をついています」

水島「うん」

モーガン「以上です」

水島「はい。今のは中々ショックな話ですけどね…」

茂木「ちょっと質問、いいですか。さっきの Josha Wong の話」

モーガン「はい」

茂木「ポンペオが亡命を拒否したっていうことですけども、アグネス・チョーさんはカナダに…」

モーガン「カナダに行きました」

茂木「行きましたね。やっぱり彼女もアメリカが拒否したっていうことですか」

モーガン「いや、それは本に書いているんですけどもアグネス・チョーの詳細は、どうだか、よく判らないです。すみません。カナダに行ったことはルートが違うなあと」

室伏「でも未だ亡命はしていませんよね」

茂木「あっ、そうなんですか」

室伏「留学っていう形で行って」

水島「留学って事例になっているんだよね。亡命申請はしていませんでしょう」

室伏「中国があれですよ。香港政府が指名手配っていうやつですね」

茂木「戻ったら逮捕と」

水島「出頭期間が過ぎたっていうことでね」

室伏「はい」

茂木「なるほどね」

水島「だから逮捕するって言っていますけど。はい、有難うございます。エルドリッチさん、お待たせしました。お願いします」

エルドリッチ「はい。こんばんは」

水島「こんばんは」

エルドリッチ「皆さん、かなり否定的、悲観的になっているんですけども、実はもっと深刻です。
(苦笑) アメリカの事情」

一同「(笑)」

エルドリッチ「ようやく、皆さんが解るようになって来る気がする」

水島「なるほど、はい」

エルドリッチ「半分、冗談ですけども半分、本気で、皆さんが私より早く気付いた方も沢山、いらっしやるし、私は9年前からアメリカが非常におかしくなっているのを自分の経験から感じていたんですけども、これ程、酷くなるのは本当に想像も出来なかった。

だからモーガン先生のように非常にショックを受けているし、しかも反省しているところが沢山ある。やっぱり、日本国民が本当に早く気づいて欲しいという風に思っています。最近までは未だ主体的に、ちょっと動いていた気がするんですけども、今は全くロボットとかゾンビの様にもなって、自動的に自ら協力しているという感じになっている。アメリカの国民、有権者と日本の国民、有権者と非常に大きな共通点があると思います。自分達は自分の国をコントロールが出来なくなっている状態で、選挙は無意味になっている」

水島「うん」

エルドリッチ「つまり、自分の代表であるはず政治家が国民、有権者の為に全く動いていない」

水島「はい」。

エルドリッチ「先程、山口さん、そして及川さんがイギリス銀行の話をされていたんですけども、あとはオバマ政権の時、まあ、オバマ候補、ああ、まあ、大統領って、まあ、内閣、その政権を決めたのはゴールドマンサックスだったと、よく言われているんですけども。今のバイデン政権、自分が大統領になりたい、自分で大統領として政権を運営していると未だ思っている人が居るようですけども…」

一同「(笑)」

エルドリッチ「やっぱり背景にある勢力を見ないといけない。ディープ・ステートという言い方もあるけれども、もう一つがパーマネント・ガバメント、永遠に永久的政府。で、彼らは大統領より力があるということです。最近、よく言われていますけれども、先程、モーガン先生が紹介した映画も、もう別の政府、或いは、第四権力になっている。

本来の政府より力を持っている状態になっている。その意味でポリス・ステイトの話で、その警察国家ですけども、これが一般市民、或いは、その声をあげている市民に対して、国家権力を使っているだけではなく、トランプ候補、トランプ大統領に対して国家権力が使われている。毎日のように色んな裁判の報道があるんですけども、トランプと関わる裁判。これ以上、彼が政治が出来ないように、権利を奪うだけではなく彼が資金的、そして時間的に選挙活動が出来ないように、毎日のように各州で裁判をやらうとしている。

非常に恐ろしい状態になっている。今日、沢山の話が出たんですけども、最後にモーガン先生がおっしゃっていたアメリカが旧ソ連の様になっていると、まあ、ある著者の話を引用していたんですけども、私は別のところで似ている発言を聞いたんですけども、その方が、アメリカがより悪い状態になっている。

昔は旧ソ連の、まあ、国民はソ連政府が嘘を言っているのは、最初から判っていた。しかし、残念ながらアメリカ人達は未だ政府が嘘を言うという心の準備が未だ出来てない人が多い。なのでアメリカ国民

が早く気づき、そして日本国民がアメリカのようにならないで欲しいとなっているという風に思います。以上です」

水島「はい。有難うございます。大体、皆さん、それぞれ、実例を挙げながらお話し戴いたと思うんで分かるんですけど、ここに今日の話のレベルと言うと、おかしいけど、その内容ですけども、これは殆ど地上波とか色んなメディアでは言われていません。或いは、保守系とか何とか言われる、それぞれお持ちのインターネット・メディアとかは別として、本当にこういう問題、実は、日本がこういう状態である。実はアメリカも今、そういう状態である。

世界がこういう状態であるっていうのは、やっぱりウクライナ戦争が3年前、始まりましたけど、その辺りから、やっとね、段々、みんなが、ちょっと変だよというのが解って来た。特に我々の国の戦後保守と言われた人達は、いつの間にか構造改革が始まって以来だと、私は大雑把に見ているんですけども、最初の頃の主権回復という、実際、回復していませんけども回復したと言われた時、自民党は立党宣言で自主憲法制定、或いは、自主防衛。

駐留軍が居なくなっても、我々の国を自分で守るという極当たり前のことが、いつの間にか自民党の党規とか規約というのは、どんどん変えられて今や昔の面影は一切、無くなっている。私がやっている国民運動は、実は自民党の立党宣言の原点に戻るだけの、別に、そんな変わったことを言っているつもりは無いんだけど、これが異常になっているっていうか異常に聞こえる。極右とかね。こういうふう聞こえるような状態になって来ているっていう、それは、やっぱり、今、皆さんにおっしゃって戴いたように現状認識が出来ていないから本当のことが判らないから、これは、そういうメディアがやってきたんですけど、インターネットで辛うじて知ることが出来るチャンスは、皆さん、持つようになってきたという状態です。

ただ、このインターネットの中でも、例えば、あのコロナ・ウィルスの問題、ワクチンの問題、もう、これは、あつと言う間に、まあ、及川さんもバンされましたけどね」

及川「うん」

水島「我々が今、一番、直面する具体的な問題なんかだと、まずWHOとパンデミック、それと、くっつけられた緊急事態条項。或いは、インチキな憲法改正論が、みんな、パッケージで通そうとされている。結局、日本っていう国が益々植民地化というか、こういう国になっていくっていう現状はあると思います。

そして、もう一つは、今回の安倍派や二階派の解体というか、まあ、バラバラにされたと言っているんですけど、やっぱり、敢えて私が言っとなきゃいけないと思っているのは、山口さんが先々週ですか番組で話してくれたんだけど、言論弾圧というか原稿をね、もうゲラ刷りまで行ってね、もう印刷寸前までいったのに突然、没にされてね、掲載されなかったっていうことでした。これは名前を言いますとHanadaです」

茂木「おお」

水島「私は昔、Will 時代は、ずっと連載を書いたりしたりして花田さんともお付き合いはあるんですけど、やっぱり、山口さん、私から個人的に、そっちの問題で話し合っていなかったんだけど、これは、いかんということで花田さんに連絡をしてね、一体、どうなっているんだという話をしたら、いやいや、そんなつもりはありませんとか言って、まあ、内容は、みんなに言わないで下さいねっていうから細かくは言いませんけど、でも大雑把に言うと、うちは悪くないと。山口さんから原稿を貰ったら、ちょっと納得できないところがあったので言ったら、それっきり連絡が来なくなったと。こういうような、でも現実に私は山口さんから聞いていますからね。ちゃんと出して校正してゲラ刷りまで行って」

及川「テーマは何だったんですか？」

水島「うん、安倍晋三暗殺でしょ」

及川「ああ、それ。はい」

水島「あの真相究明ですよ」

及川「ああ〜」

山口「連載していたんですけど、突然、まあ…」

水島「私が言うよりも、山口さん、もし、よかったら」

山口「いや、まあ、この話は全く別の話でね、申し訳ない…」

水島「いやいや、でも、これはアメリカとの関係ですから」

山口「まあ、月刊 Hanada で、去年から、もう7回ぐらいかな」

水島「うん」

山口「『安倍晋三元首相を暗殺したのは誰か』」

水島「うん」

山口「山上哲也被告の立っていた位置から、あの銃で安倍さんの右鎖骨下動脈を傷つけることが可能だったかということに絞って連載を書いていたんですが、前号で原稿を入れてゲラが出来て、私はオッケーを出して、そうしたら、我々は普通、そのまま出るんですよ」

水島「うん、うん」

山口「これが突然、没にされたんですね。私と連絡が取れなかったから載せなかったっていうのは完全な嘘で」

水島「嘘ですね。はい」

山口「ええ。私はゲラにオッケーを出している」

水島「うん」

山口「ゲラにオッケーを出したら、それは載るんですね」

水島「うん、普通ね」

山口「ところが、それは、ちょっと引用が多いとか言って来たから、じゃあ、僕が直しますよと」

水島「うんうん」

山口「没にされたら困るから」

水島「うん、そりゃ、そうですね」

山口「月刊 Hanada の編集長として、ここを直して欲しいっていうのがあれば、私、いくらでも直すと言ったあと連絡が無いまま没にしたのは月刊 Hanada 側なんです」

水島「うん」

山口「ただ、花田さんを個人的に攻撃する意図は全く無くて今回の議論に戻せば日本国民に伝えたくないこと、それを圧殺しよう、隠ぺいしよう」

水島「うん、そこなんですよ」

山口「伝えない、報道しない自由、その権利を集団で行使しようという日本の民主主義の根幹であるジャーナリズムを破壊しようとする」

水島「そう」

山口「例えば及川さんのYouTubeチャンネルが突然、バンされてしまった。それはSNSと雑誌で違いますけれども、私達、日本人の手には最早、ジャーナリズムの自由も、それから情報を取捨選択する自由すら最早、殆ど無いんだという危機感今日の議論にも決して矛盾はしないものなんだろうなと思っているんですよね」

水島「これは大事な話でね、やっぱり、さっきも言論の自由やね、アメリカや日本が今、どういう状況にあるかっていうお話を、エルドリッチさんから、お話を伺ったんだけど今の山口さんの問題で言うと、そこなんですよ。

それと、それまで、ずう〜っと連載してきて、この問題について、ずう〜っと疑問を呈してきた。私も手を挙げて来たつもりなので度々色んな事を言って来たんだけど、そうすると、これが雑誌の問題で言うと、取り上げるのは山口さんだけだったのに居なくなるんですよ。もう、みんな、黙っちゃう。

ずっと取材やって来てアメリカまで行って、色々やってきた人だからあるけども、これって、ちょっと拙いんじゃないの。私は、その記事を読んだりしていないので何か知らないけど、やっぱり、これは、おかしいよね。あの犯人だけでやったとは思えない。発射しただけじゃないとかね、色んな話をして、それで前々からおかしい事があるじゃないですか、何故、こんなに早く焼いちゃったんだって。もっと徹底的に司法解剖して、弾は何処へ行って、どうなったかっていうことを、2回、矛盾した記者会見をやって、あつと言う間に焼いちゃってお骨にしちゃったけども、そういうものを考えると、やっぱり変だよって思います。

それから奈良県警の対応もおかしかったしね。みんなで安倍という者の存在を消したかったことが何かあるんじゃないかと。そこが、やっぱり日本にとっても大事な話ですよ。その結果、今の腰抜けた安倍派のあの議員達ね、なあ〜んにも出来ないでしょ。もう文句も何も、ひとつも言えない。岸田に対しても何も文句を言えない。これが、本当にバラバラにされた議員の、それこそ構造改革（苦笑）日本の各財閥が構造改革で駄目になってバラバラにされたけど、今回、政治家が、みんな、バラバラにされて何にも異議申し立てが出来ないというような状態を作り上げた。

だから、あの安倍さんの死っていうのは単に偶然とは思えないし、偶然にしちゃいけないし、それから日本の政治の在り方に物凄く影響が大きいというのがあったので、今、敢えて山口さんに言って貰った訳です。だけど、本当に気を付けないと、私は花田さんに呼びかけました。花田さん、これねえ、ちゃんと誠実に対応しなきゃ駄目だよ。絶対、観ているから一応、言っておきます。もう、いい加減にしろよって、本当に、私は言いたいけどね。まあ、前も一回、そういうのがあったんですけどね（笑）彼は覚えていると思うから、これは言いません。こういうことを考えた時、せつかく雑誌を出す編集者とかね、WILLにしろ、正論にしろ、Hanadaにしろね、みんな、やっているんだから、いいものを作ってよと。これ、当たり前なんでね。

特に真面目に一生懸命やっている人達の言論弾圧を自分からやっちゃいけないっていう、ねえ、一応、名誉の為に言っておきますと、昔、花田さんは、文春のマルコポーロ。これのユダヤのホロコーストについて疑念を呈するものを作って抗議が来て、それで辞めざるを得なくなったっていうようなこともあった訳で、それでビビっちゃった訳じゃないと思いますけども、やっぱり我が国の元総理大臣が非業の死を遂げた訳ですから、そこは、きちっと仏さんと一緒に共に闘ってあげるといようなことで頑張って貰いたいと思います。これに付け加えることがあったら言って下さい。いいですか」

山口「ただ、今回の日米関係についても報道、それから情報が歪んでいる」

水島「ああ」

山口「やはり、ここにいらっしゃるような皆さんが世界史的な、或いは、今日的な観点から様々な発信をしていてもウクライナにネオナチが居ないんだと主張する人が、実は日本の大手メディアのマジョリティに居て」

水島「うん。まあ、そうですね」

山口「結果としてタッカー・カールソンがインタビューする迄、この2年間、プーチンの肉声を私達が耳にする機会はXというプラットフォームが無ければ未だに無かったってことになる訳ですね」

水島「うん、そうですね」

山口「このことと安倍元首相の暗殺の真相究明が物凄い圧力の中で圧縮されていくことが、僕は決して無関係ではないんだと思いますね」

水島「いや、全くその通りだと思いますよ」

山口「そうすると日本のメディア、大手メディア」

水島「うん」

山口「それからSNSのプラットフォームの運営の中にも、向こう側の手が入っていて」

水島「入っていますね」

山口「資本として入っていて、或いは、運営者側として入っていて」

水島「そうですね」

山口「じゃあ、プーチンが何故、今回、2年前に戦争を始めたのか、彼の論理を世界中の民主主義陣営の有権者の耳を塞ぐ、共闘している、私達は、まず、その人達と戦わない限り、日米関係がどうなっているかなんて事実が見えない以上、戦争をしているんだったら両方の話を聞かなきゃいけない。ゼレンスキーの話は、もう100回も200回も聞いている」

水島「うん、そう」

山口「何故、プーチンの話だけ僕達の耳に入って来なかったんだろうかっていうことは、私達が民主主義や自由や平等を考える時の足場となるジャーナリズムが、事実上、崩壊しちゃっている。SNSも崩壊しちゃっているということには強い危機感を持ってね」

水島「そうですね」

山口「ええ、続けて行かなきゃいけないんだろうなあと思っています」

水島「はい」

室伏「今、非常にいいお話が出て、ちょっとお話をさせて戴くと、先程、メディアによるキャンペーン、メディアを使ったキャンペーンっていうのが、かなり極端になって来て、まあ、これまで、私は財務省の話は色々してきたんですけど、最近の言葉で、私も知らなくて教えて貰って知ったんですけど、『もしトラ』ってご存じですか」

一同「ああ〜」

水島「えっ？」

室伏「『もしトラ』」

水島「知らない。教えて」

室伏「もしもトランプが大統領になったらっていう話ですけど」

水島「ああ、その『もしトラ』ね。思い出した」

室伏「『もしトラ』っていうと何かSNSで誰かが考えたんだろうと思うかもしれないんですけど『もしトラ』っていうことに関連する記事が、わあ〜っと出ているんですよ」

水島「うん」

室伏「あれは明らかに後ろに代理店」

水島「うん」

室伏「特に恐らく外資系の代理店が居て、そういうキーワードを作って…」

水島「ああ、なるほどね」

室伏「それを撒いて悪いイメージを付けようっていうことをやっていると思います」

水島「ああ〜」

室伏「だからね、そういう風に知らない間、知らず知らずに騙されている、乗せられているようなキャンペーンっていうのが、恐らく、これから、もっと増えて来るんじゃないかなあと」

水島「うん」

室伏「その後ろに居るのがDとかHじゃなくて、外資系の、まあ、具体的な名前は挙げませんが、知ってますけど」

水島「いいですよ、はい」

室伏「はい。(笑)」

一同「(笑)」

室伏「まあ、元々、僕は、そこの人と飲んでいたりするんで、あれですけど。ちょっと、そこをね、そこまで考えないと、今、いけない状況になっていますね」

水島「まあ、そうですねえ」

室伏「はい」

水島「はい。他に無いようですので、エルドリッチさん、どうぞ」

エルドリッチ「はい。先程の山口さんの話の延長ですけれども、やっぱり、水島社長が、いつも、おっしゃっているんですけども、戦後、色んなタブーがあったので、そのタブーは中々語れない。チャンネル桜はタブーを破る目的で、多分、活動してきたと思うんですけども…」

水島「はい」

エルドリッチ「やっぱり時間が経てば経つ程、色んなタブーが増えて来たということなので…」

水島「そうですねえ」

エルドリッチ「ということなので、やはり視聴者を始め国民が自ら忖度したとか、言えなくなったことを、多分、気づいていると思う。これが健全な民主主義、言論の自由な社会でないはずです。特に、最近、それが増えている気がする。先月、モーガン先生と、ある案があって、今、日米間で、まあ、お互いの国の間で、そして日本国内、アメリカ国内で、どのタブーがあるのか語れないタブーがあるのか。リストを作ったので、また、いつか紹介したいと思うんですけども、本当に深刻になっている。

だから一人一人が、自分で、このような社会で生きていていいのかということ、やっぱり、今こそ立ち上がらないといけない。声を出さないと見えなくなる社会にもなりつつあるので、今こそ、やっぱり行動して欲しいという風に思っています。

水島「はい、なるほど。えーと、他にいいですか」

茂木「あのねえ…」

水島「あ、どうぞ、はい」

茂木「タブーの一つがLGBTQですよ」

水島「はい。そうですね」

茂木「それで去年ですよ、リバーシブル・ダイチっていう女の子を強制的に男の子にするっていうことが、アメリカ、イギリスで行われているっていうことが…」

水島「ああ、そうなんですか」

茂木「具体例を沢山、挙げた本が角川で出版、翻訳されるはずだったんですよ」

水島「あっ、あ、思い出した、それ、ありましたね」

茂木「今年の1月に刊行予定だったのが、土壇場で中止になった」

水島「はい。中止なんだね」

茂木「だから、もう角川が、こういう圧力に屈したんですよ」

モーガン「そうです」

水島「そういうことですよ」

茂木「さっきのHanadaさんと同じで、いや、僕は、Hanadaさんにもお世話になっているので、あまり言いたくないんですけども編集者とか本を作る人はねえ、もう、そこは本当に覚悟を決めて下さいよ」

水島「ねえ、本当に覚悟を決めないと駄目だと思います」

茂木「うん。出来なければ、もう、やめた方がいいよ」

水島「うん。良い事を言うねえ。(笑)花田さん、聞いているかあ～って、ちゃんと、みんな、そう思っているんだよ、うん。問われていますよ。何十年も編集をやって来たことは尊敬するところがあるんだから、商売も上手いしね。本当に、中々大したものだけでもね。最後のところで茂木さんのおっしゃった通りだよ、でも(失笑)最後のところで踏ん張り見せてくれたら(拍手)」

茂木「うん」

水島「こうなるんだから。まあ、男、花田を見せてくれよ」

茂木「うん」

水島「ね。はい。ということで(笑)どうぞ、続けて下さい。もう、大丈夫ですか」

及川「LGBTQのところですけど。さっきモーガンさんが『American Conservative』の雑誌の記事でLGBTQエンパイヤー。私は、その内容を読んでいないので分かりませんが、でも、それとウクライナとの関係ですよ」

モーガン「はい」

及川「それでね、私は、そこが凄く重要だと思っていて、凄い重要な点を出してくれたと思ったんですけど、ああ、これですね」

モーガン「はい、これです」

及川「LGBTQとウクライナですよ」

モーガン「はい」

及川「私はLGBTQの問題って色々あると思うんだけど、LGBTQの最後のQ」

水島「うん」

及川「Qっていうのは英語で Queer」

モーガン「Queer」

及川「Queer って変態でしょ」

水島「変態っていうことですか」

及川「変態ですよ」

モーガン「そうです、そうなんです」

及川「これ、何でも入る訳ですよ。全部、そうだけど。はっきり言えばね、全部、そうだけど、このQに何でも入っていて、ここに何を入りたいのかっていうと、YouTube で中々言い難い小児性愛ですよ」

水島「まあ、一番、許されないことじゃないですか」

及川「推進している側は、これを入りたい訳ですよ」

水島「うん」

及川「その世界の中心がウクライナじゃないですか」

モーガン「そう」

水島「あーっ、そう、あっ…」

及川「そういう意味ですよ」

水島「ああ、そうだよ。うん」

及川「去年、このウクライナの戦争が始まって、国際刑事裁判所っていう訳の分かんない国際機関があるんですよ」

水島「うん」

及川「ここがですね、プーチン大統領とプーチンの配下にいる、もう一人、ロシアのプーチン政権の閣僚二人に逮捕状を出した訳です。その逮捕状の容疑がウクライナの子供達を不法に移していると」

水島「売ったっていうね」

及川「だから、Kidnapping みたいなことをやっているっていう話なんですけど」

水島「ああ～、Qだね」

及川「これね、ウクライナの子供達っていうか、親の無い子とか孤児が、結局、こんなの YouTube で言えないけど、要は小児性愛の為に買われている訳ですよ」

水島「う～ん…」

及川「プーチンは、それを救おうとした訳ですね」

モーガン「はい、その通りです」

及川「実は、ロシアの中で、そういう孤児の世話をしている活動をやっていたのが、プーチンと一緒に、もう一人、逮捕状を出されたマリア・リビア・ベロワっていう女性ですね」

水島「う～ん」

及川「マリア・リビア・ベロワっていう人で、この人はロシアの中で、孤児とか障害児の人達のお世話をする施設を運営して活動をやっていた慈善事業家で、御主人はロシア正教の神父さんですよ」

水島「うん」

及川「自分の子供と養子に入れた子を含むと子供が13人ぐらい居ます。自分の家族は、それだけ居て、その活動をプーチンが見つけた、じゃあ、自分の政権で子供の権利を守る、まあ、日本で言う大臣ですね」

モーガン「はい」

及川「これをやって下さいっていうことで、それに入れていただけなんですよ」

モーガン「はい」

及川「こういう人に逮捕状を出すっていうのは一体、どういう意味なのか」

水島「そうだねえ、これねえ…」

モーガン「そうですよ」

及川「結局、こういう子供を狙っているんだから、その子供を守ることなんか、やめろという意味ですよ」

モーガン「今、及川先生がおっしゃった通り、正に、この記事の中で、どういう wording が出るかって言うと、我々の帝国はウクライナで何を狙っているかって言うと、Queering Donbass、Queering Donbass。ドンバスを変態化しようとしているんじゃないかって、正にその通りなんです」

一同「うん」

モーガン「この帝国は普通の、ただ地政学的に、この場所が取りたいとか、ナポレオンのような帝国じゃなくて、サイコパスが運営している帝国です。いくらでも暗い事がやりたい。アメリカ国内ではトランスジェンダーっていう隠れ蓑を使って、例えば12歳、13歳の女の子の乳房が切除されていて、こう13歳、14歳の男の子の、言っちゃっていいですか、こう…」

水島「いや、いいですよ」

モーガン「ペニスが切除されて、それが今のアメリカ帝国の意味ですよ。それが目的です」

水島「馬鹿だねえ…」

モーガン「それが日本にも来ているし、もう、その波は防波堤を超えているんですよ」

水島「はい、そう」

モーガン「それで、その防波堤を超えるようにさせたのは自民党ですよ」

一同「うん」

モーガン「所謂、保守系の政党がそうさせた訳ですよ。目が覚めれば、どういう仕組みなのか直ぐ解ると思うんですけども、正に、この通りですよ。アメリカ国民は、もう分かっていますよ」

水島「う～ん…」

モーガン「日本国内でも、もう分かっている人が増えていると思いますよ。これは普通の帝国じゃなくて、ありとあらゆる国の文化と伝統をぶっ壊して、結局、カオス、地獄のような状態をつくるのが、この帝国の狙いですよ。普通じゃないですよ。なので、日米同盟とかを言っている拝米保守とか、もう私の敵ですよ」

水島「そうですね」

モーガン「親米保守は共産主義者よりも私の敵です」

水島「そうですね」

モーガン「共産主義者はLGBT法案を採決していませんよ」

水島「なるほどね」

モーガン「それ、親米保守がやったんですよ。もう、この国が危ないです。私の国の状態を見て下さい。12～3歳の乳房を切除するなんて、それは正に変態というよりもサタン教の一種じゃないですか」

水島「そうですね」

モーガン「それは悪魔崇拝ですよ」

水島「う～ん…」

モーガン「もう一つ、先程、室伏先生がおっしゃったことも同時に色々な角度から同じような主張がタケノコのように出て来る。それが、まあ、安倍さんのことを思って、私が、それに初めて気づいたんですけど、安倍さん事件は、ちょっと、おかしいじゃないですか、って言っている人を、同時に月刊拝米の人々が同時に、陰謀論、陰謀論、陰謀論と繰り返し、繰り返し陰謀論と」

水島「はい」

モーガン「それは、おかしいですよ」

水島「うん」

モーガン「みんなが同時に偶然、同じ記事を書いたんですかと。それで、もう一つです。私が、このチャンネルに出演させて戴いて、敢えて人の名前を言って批判しているんです。他の雑誌とかでも、敢えて人の名前を指摘して批判しているんですよ」

水島「うん」

モーガン「反応が一切、来ないです。一切、来ないです。それも、おかしいです。もう、こんなに喧嘩を売っているんですよ」

一同「(笑)」

モーガン「でも取り組んでくれる人は居ない。こんなにモーガンが、こうやって、ぶっきらぼうに、お前とかっていう言葉を使って、どっさこいと言っているんです」

一同「(笑)」

モーガン「でも取り組んでくれる人は皆無。おかしいと思いませんか」

水島「いや…」

モーガン「それは、おかしいと思いますよ」

水島「基本的に黙殺っていうね」

モーガン「そうです。基本的に黙殺」

水島「奴らは、そういうやり方をするんですね」

モーガン「はい」

水島「居ないも同然みたいなね」

モーガン「はい」

水島「知らんふりをするっていうことですけど。今、丁度、皆さん、知った方々は衝撃的なことだと思います。LGBTのQはね、ウクライナと、どう繋がっているかっていうね。つまり正直に言うと、このウクライナ問題の中で1千数百万人って今、言われていますけど、ウクライナから外国へ出たって言われているけど、ロシアに60万人ぐらいが行っているんですね。あとはヨーロッパのドイツとか、そういう所へ行っている。

この人達は戻りたがっていないっていうこと、それと、もう一つ、こういう戦争の結果、さっき金儲けした石油メジャーや金融機関、ブラックロックみたいな3割、ウクライナの農地、買っちゃった奴とかね、武器商人とか食糧メジャー、みんな、株が暴騰して大儲けしたっていう、これは、もう、その通りだけど、と、同時に、もう一つは安い白人労働者を、ヨーロッパに輸出したっていうね」

モーガン「はいはい」

水島「安い労働力が1千万人居たら本当に楽になるっていうかね。こういう戦争が生み出した奴隷労働者っていうか、まあ、奴隷とまでは言わないけども、凄い低賃金労働者が、供給できたっていうね。だから、ありとあらゆる意味で、そのウクライナ戦争っていうのは、そういう支配層にとっては良かったっていうことが解ると、もう一つ、出ていないので、一応、指摘だけはしておきますけども、ウクライナにあった細菌研究所ですね。あのウィルス研究所」

モーガン「はい」

水島「これは、その責任者、当人が言っていましたけども、あれは、細菌兵器、ウィルス兵器を造っていたんだろうって言ったら、いやいや違いますと。防御の為のだって言うけど、防御というのは攻撃と防御だから守る為には攻め方が判らなきゃ出来ないんだから、だから、やっていたっていうことじゃないかってね、ポロっと、しっかり言っているんですね。

だから、ウクライナという所は、そういう問題もあるんですけど、場所がね、所謂、ダーティなものを全部、引き受ける。子供の供給や労働者の供給や色んなものを供給する場所としてアメリカに使われていたということも明らかになったということ。

北朝鮮も、ちょっと近いところがあって、実は、前に各諜報機関の資金集めの場所だったという話もありましたが、これがロシアと繋がっちゃったので、やり難くなったっていう話もありますけども、それと、もう一つ、今、モーガンさんや及川さんから出たように、これは、後半で議論が出来たらと思うんですけど、いずれやりたいと思うのは、西洋型の価値観」

モーガン「はい、そうですね」

水島「近代主義的な価値観が、実はプーチンを始めとしてノーを突き付けられて来ている。あのタッカー・カールソンとプーチンの対談っていうのは、この間、及川さんとね、少し神学というか宗教的なこともお話ししましたが、つまり、今迄、二十一世紀の初頭まで、こうやってきた支配的な価値観だったものが根本的に転換させられようとしている。

実は、これを言って誤解されたんですけど、やっぱりアジア的な価値観とかユーラシア的な価値観、プーチンのスラブ主義とか色んなものを含め、日本の問題も含めて、こういったものとヨーロッパ近代主

義の価値観が今、転換されようとしている。或いは、ぶつかり合っているというのが今、この世界の状況の中じゃないかなと。

だから、トランプの支持層っていうのは福音派って言われる割と熱心なというか凄く強い信念を持った宗教人達がかかなり多いって言いますけど、こういったものと今言ったグローバリズムと言われるグローバリスト達のやってきた価値観が完全にぶつかって、今、対立状態になっていて、それで一部では混乱になっている。実は、戦後、何も無くなった日本の中で白紙状態の中で金儲けも日本型の資本主義が否定されたあとは本当にカオス。何の指針も何も無い。残るのは天皇陛下だけというね、確かに、そうなるんですけども、人類の中で、今、そのぐらい文化的な戦争というのが始まっているんじゃないかということも含めて、日米関係っていうのは、その象徴かも分からない。

それと、もっと言うと、さっき言ったアメリカの中でもトランプ、バイデンという形の解り易い振り分け方だけど、こういう民主主義とか自由・平等・博愛とか、こういった近代主義的な理念で創られた国が、WASPが主役の時は良かったけどもヒスパニックや中国や色んな人達が入って来たアメリカが今、黒人を含めてコントロールがつかなくなってきている。この状態というのは日本もそういう移民国家にしようと、やっていますから、皆さんと共に考えてみたいと思います。一回、お休みします」

一同「(礼)」

<後半>

水島「はい。というようなことで、休みの間も色んな議論が続いていたんですけど、私達が、これは1990年代ですけど、私はチャンネル桜を開く前にフィリピン・チャンネルというのを衛星放送でやって、これで金が儲かったので、チャンネル桜を始めたんですけども、その時、フィリピンへ行って判ったのは、色んな各国の人達、日本もそうでしたけども、日本人もそうで韓国人、台湾人、或いはドイツ人、イタリア人、アメリカ人はみんな女性を買いに来るんですよ。或いは、フィリピンとかタイの場合は男の子ですね。ある有名なお笑いの芸人さんはホモツアーというかですねえ（失笑）同性愛の人を集めてマニラに来て、そういう子達を買って楽しむみたいなことまでやっていた1990年ぐらいのことですけどね。だから丁度、バブルがはじける前ぐらいかな。

そういうようなことを見た時、植民地の経済っていうのは単なる経済的な収奪や、そういうものだけじゃなくて、或いは、労働力の収奪とかそういうものだけじゃなくて人間の性の在り方とか、こういうことまで現実的に買われるんだ。組織化されるんだ。

それで我々が考えるのは、有名になりたいから、社長の言うことを聞いたっていうのがあるけれども、現実には、こういうのは、私も、もう50年以上、ずっと脚本家や監督やっていますから、私は、そういうことをやっていませんけど、そういう人達が沢山、居るっていうことは本当に、よく知っているんですね。また、そういうような流れの中で言うと、さっき、ちょっとお話し戴いた、今のLGBTの、あのう、いや、これは言えませんっていう感じのことばかりだったんですけども、ただ及川さんから、私が聞いたのは、所謂、小児性愛ですね。LGBTQのね、子供にチョッカイ出してねえ、欲望を遂げようみたいなね、こんな極めて許し難い連中が市民権を得ようとしているっていうこと自体が本当に、我々の生き方とか、そういうもの自体が問われていることになると思うんですけどね。

そういう意味で、今言った日米関係というのは、昔、青島幸男さんって、私が『いじわるばあさん』をやっていた頃の人が、佐藤総理をアメリカの『男妾』っていう言い方をしていました。色んな言い方さ

れました。本当に色々な形で、アメリカの言うことを聞かざるを得ない状況の中で、日本の場合、出来る限りの抵抗みたいなのをしたのもあったけれども、基本的には、どんどんなって、岸田さんに至っては、もう右を向けば何でも右を向くし、何でも言うことを聞いちゃう。反抗するとか、そういうものが、もう全く無くなっている。

ここまで来ちゃっているという状況の中、我々は、この現実には気が付いた訳です。そういう中で、もう一回、日本をやり直す、或いは、選挙で、アメリカも今、やり直しをする可能性がある訳です。この問題について、将来的に、そのねえ、将来って言うか、近い将来ですね。今年の問題ですけども、皆さんがどう見ているか聞いてみたいなあと思います。及川さんからお願いします」

及川「今日、前半で、室伏さんが言われた中で、アメリカからの農産物の輸入で」

水島「はい」

及川「交渉すればいいじゃないかとおっしゃいましたよね。私は、これを凄いキーワードだと思うんですよ」

水島「うん」

及川「日本とアメリカの関係っていうのが本当に友達同士で、友好関係で、対等な同盟であるんだったら話し合う、交渉するっていうのが当然、あるべきこと。しかし、これが無いのは最大の問題じゃないかという風に思うんですね。よく日米何とか摩擦っていうのが昭和の時代からずう〜とあって、要するに貿易の摩擦ですね。70年代ぐらいだと思うんですけど鉄鋼、鉄ですね」

水島「はい」

及川「日米鉄鋼摩擦っていう時代があったって言うんで、日本の鉄鋼業がどんどん大きくなって行って質は良くて安いというので…」

水島「うん」

及川「アメリカの鉄鋼業界が物凄く怒った。ダンピングしているという話になって、で、日本の鉄鋼、鉄の会社がどんどんバッシングされていった」

水島「うん」

及川「この時に日本の鉄鋼会社のある大手の一つの役員だった人がアメリカのワシントンに乗り込んで行って交渉したっていうご本人の話を、私、聞いたことがあるんです」

水島「うん、うん」

及川「たまたま、私のYouTubeを観ていて下さった方で、会いたって言われたので、お会いしたら、その人は70年代にワシントンDCに乗り込んで行って交渉すると。で、ワシントンへ行って、まず日本大使館に交渉したいんだと言ったら、みんなから止められたと」

水島「うん」

及川「出来る訳がないじゃないですかと。そういう立場じゃないんだということを説得されたと」

水島「うん」

及川「だけど、その人は、とにかく交渉したら何とかなるっていう信念があったらしいんですよ」

水島「うんうん、うん」

及川「じゃあ誰と交渉したらいいのかと。日本からやって来た一民間企業の単なる役員。だから知り合いも誰も居ない。でも、そんな中で、色々な人に会って話をしたら、ああ、だったら、この人に会うのがいいよと言われて紹介された人がホワイトハウスの関係の人で、はっきりと日本の立場を言ったと」

水島「うん」

及川「そうしたら、その話が政権の中枢まで入って行って、結局、そのあと日米鉄鋼摩擦は終わったという話があるんですね。まあ、それを最初、止めていた閣僚とか日本の外交官達は自分達の手柄にしたって話がありますけど（失笑）」

水島「うーん。うん、まあ、そうですね」

及川「ただ、私は、この時、この方の話を聞いて、よく日米関係っていうのは日本が従属しているんだから、ワシントンにいらっしゃると、やっぱり日本の外交官だとか、日本の政府っていうのは、とにかくイエスと言うしかないんだと。下手に何か言ったら誰々さんみたいに殺されるとか、そういうことになるっていう、まあ、そういう話ばかりが出て来る訳ですけど、本当にそうなのかと」

水島「うん」

及川「いや、それは一人や二人、何人かは、そういうこともあるかもしれないけど、しかし、それを、いつまで続けるのかと」

水島「うん」

及川「戦後、日本がアメリカに支配されて、もう来年で80年ですか」

水島「はい、そうですね」

及川「そのぐらいになる訳でしょ」

水島「はい」

及川「一体、その関係を何十年、続けるのと。百年、続けるのかと」

水島「うん」

及川「やっぱり、さっき、室伏さんが言われた通り、交渉すべきだと思うんですよ」

水島「うん」

及川「言うべき事は言って、その交渉をする肝のある人が日本の政治家、もしくは政府の中に居ないだけであって居なかったから、さっきのケースは民間企業の鉄鋼会社の一民間人が交渉に行っているんですよ」

水島「うん」

及川「もうねえ、そういうのが居ないんだったらねえ、我々で行った方がいいんじゃないかっていう風に思うぐらいですね」

水島「いや、全く、そうですね。おっしゃる通り」

及川「はい」

水島「だから、物言う人達が消されるとかね、そういうことは確かにあるし、あつたし、今もあるんでしょうけども、消されたら消されたでいいんじゃないかっていうね。それなら、また、次の奴が出て行きゃあいいんじゃないかって」

及川「そうそう」

水島「何をビビっていやがんだっていうね。だけど、これが日本のあの半導体交渉もね、押しまくられて、怒鳴りつけられて、へい、すみませんって言って認めたお陰で今、ボロボロじゃないですか。こういうようなことをやればねえ、政治家は何の為にやっているんだっていう気がする訳ですよ」

室伏「あのう、ほんとね、おっしゃる通りというか、かつては、少なくとも志を持っていたと。やろうとする人って居た訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「まあ、大統領と裸の付き合いで人間関係を築いてね、アイゼンハワーと対等に話を出来るようにしたとか、まあ、これは日本じゃなくてカナダのピアソンですよ」

モーガン「うんうん、うん」

室伏「大体、周りがね、外国の首相を、こうやって胸ぐらを掴んでやるなんて、アメリカは頭がおかしいじゃないですか。でも、それでも屈しなかったピアソンが居ますし、あとは結果的に、まあ、結果は結果ではありますけど、でも、これは最近のYouTubeの動画にも未だ残っているんですかねえ。日米構造協議の時の橋本通産大臣ですよ。あの人は、堂々と言いましたよね。竹刀で、こうやった時、あのあと、我々は独立国だからアメリカの法律に従うなんて、そんなことをする必要もないし、別に期限が決められているものではないっていうことを、はっきり馬鹿デカイ声で、横に通訳の人に聞かれているのに堂々とやりましたよね」

水島「うん」

室伏「そういう気概を持った政治家って言うか、そういう人が居なくなっちゃっている。まあ、それは、勿論、選挙制度の問題とかもあるんですけど、あとは、やっぱり、これは日米同盟とか日米関係は基軸であるっていう話を、あまりにも、ずうっと摺り込まれ過ぎているし…」

水島「そうですね」

室伏「あと、もう一つ、問題としたら、外務省が日米関係ってものに対して疑いを持ったりとか疑問を呈したりとかすると、要するに出世できないっていうか左遷されちゃうってね。まあ、正にザイム真理教を疑うと、財務省の人間が出世できないっていうのと、全く同じ構図が外務省にある」

一同「(頷く)」

室伏「尚且つ外務省、これも山口さんもご存じだと思うんですが、ワシントンの日本大使館っていうものが色んな所に情報があるんじゃないかと、特定の所からしか話を聞かない。だから、実はこの人に聞いてもしょうがないとか、特に、そのジャパン・ハンドラーズと言われている連中ですよ。あいつらと話をしても意味が無い。トランプ政権になった時に、僕は、実際に色んな所を周って来た野党議員から聞きましたけど、トランプ政権の時にはジャパン・ハンドラーズは、あいつはヒラリーの味方だから絶対、政権に入れないって言った訳です。

ところが、それでも日本ってC S I S詣でをしていた訳じゃないですか。外務省もやっていましたよね。だから、そういうところの事実を知った上で、それをひっくり返さないと、いつまで経っても外務省が今、及川さんからご紹介戴いた通り、その当時でさえも、交渉するなんて駄目だっていう何処の国の人達ですかという訳じゃないですか」

水島「いや、だからね、本当に交渉っていうのは、そういうもんですからね」

室伏「ええ」

水島「まず、拒否されることから始まるって言うかねえ。それこそ、昔、元気な頃、宮澤総理が東南アジアを中心に円の圏、エリアを創ろうとして怒鳴りつけられたと。てめえって言われたら震えあがってね、それで円圏っていうのは諦めたって話は有名だけど、やられたら、その次、行きゃあいいって言うね、特攻隊っていうのはそうだったんですよ。突っ込むことが怖いじゃなくて、突っ込む奴が次々に留まらない。どんなに撃ち落されても、無限に飛び立って突っ込んで来るって言う、これが怖いんでね。

役人と政治家が、本当に、そういうものを持ってくれたら、大分、日本の経済とか政治も変わって来ると思うんだけどねえ。ちょっと偉そうに言うようだけど、身を捨ててこそっていうのが無さ過ぎるんじゃないかっていう気がするんですけども、茂木さんは、どうですか。こういう問題は、うん」

茂木「これはね、対米従属だけじゃなくて対中従属でもあるんですよ。全く同じですよ」

水島「まあ、そうです」

茂木「何も言えないんですよ」

水島「そうだねえ」

茂木「何をされても何も言えないんですよ」

水島「そうなんだねえ」

茂木「東シナ海にブイが浮かんでいても…」

水島「(苦笑)」

茂木「怖くて触れないんですよ」

水島「いや、そうなんだよ、私ねえ、もう、ばらしちゃっていいけど、あれが出来た時、何とか、あそこへ行ってね、日の丸を貼ってこいと」

一同「(笑)」

水島「10メートル程、あるっていうからね、爆破は出来ないだろうし、壊す事も出来ない。鉄製の凄く立派なものなんです。だから、じゃあ、少なくとも、べったりと日の丸を貼って来てやろうって言ってね」

一同「(笑)」

水島「ところが特定できないんですよ。誰も教えてくれない。何処に…」

茂木「あ、教えてくれないんですか」

水島「場所。勿論、行くまでも誰が行くかっていうのもあるんですよ」

茂木「うん」

水島「漁師さんだって、みんな、嫌がるからねえ。撃沈されたら困るとかね。色々あるけれども、それでも、実は、そういう可能性あった。もう、悔しいけど、これは駄目だっていうことが分かったから言いますが、あの直後に計画したんですよ。だから本当にね、あんなの、やればいいんですよ。誰でも、やってみりゃいいんですよ。ふっとやって撃たれて死んだら、それでしょうがないって決めりゃあいいんですよ、本当はね」

茂木「だってフィリピンやインドネシアでさえ、中国の違法漁船を爆破するでしょ」

水島「そうですよ」

茂木「やればいいんですよ」

水島「私も全く、そう思う」

モーガン「そう」

水島「ちょっと決意すればいいだけの話でね、腰抜けばかりが…」

茂木「昔、石原市議も言っているけども、みんな、艱難になっちゃって」

水島「そうですねえ、はい。艱難とか、お解りになると思いますけど。こういう交渉でも、やっぱり交渉っていうのは粘り強くやる訳でね。諦めちゃいけないですよ。しつこいぐらい。前に山口さんでしたっけ、やっぱり日本の中で誰があれだったかっていう話をしてくれましたけど、そういう人達も居た訳ですよ。核武装を言おうとしたとかね、そういう人達の後に続いて色んな事をやる奴が居なかったんですよ。

まあねえ、そういう人達が、やっぱり、今、やらなきゃいけないのと、ただ、あまり根性論で言ってもしょうがないからね。ただ、もうひとつ、ああ、どうぞ。ああ手を挙げているから、失礼、スタッフが教えなきゃ駄目だよ」

一同「(苦笑)」

水島「はい。エルドリッチさん、すみません。どうぞ」

エルドリッチ「先程、ちょっと触れていたんですけれども、私は政府にも務めていたので、日本の外交官とか政府の関係者が遠慮するところもあるかもしれないんですけども、それは自己保身の為が非常に多かったと思うんです」

水島「そうですね」

エルドリッチ「私は、それが問題と言うより、今、日本政府が積極的にアメリカのグローバリズムのアジェンダに協力している。喜んで協力している方が危険だと思っています」

水島「全く、そうだねえ。いや、その指摘は本当に正しいですね。喜んでやっていますよね。はい、どうぞ」

モーガン「交渉という言葉が今、飛び回っていますけれども先程、及川先生がおっしゃった通り日米関係は平等な関係ではなくて交渉する必要は無いと思います。日米関係を代表するところのイメージ、映像を選ばなければならなければ、私は、奈良市内の路上で横になっている安倍さんの姿が日米関係を表すイメージ、映像だと思っています。それは、交渉の結果ですね。安倍さんが仁義を尽くして、あの国と交渉しようとして、結果としては、奈良市内で出血で死んじやったっていう交渉の結果ですね。米国と交渉する必要は無いと思います」

水島「うん」

モーガン「愛国者は、もう話し合っているとか、そのような時期は通り過ぎました。何処まで言えるかと、ちょっと限界があるんですけども、これは侍の国です」

水島「うん」

モーガン「昔の時代でしたら色んな嫌な奴は長生きしなかったじゃないですか」

水島「(笑)」

モーガン「それで、まあ、交渉するとか、もしかしたら、煙幕として交渉するんですけども、こっそりと行動をして、こっそりと核武装をして、こっそりと色々やって米国を騙す。米国を裏切る時期が来ていると思います。Pride (プライド) は、どういう和訳でいいかと、私は傲慢の意味だと思うんですけども、聖書的に言うと、それは神殺しじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「私は神より神だと。それが日本に来ているんですよ。ただ聖書の中の意味だけではなくて日本文化に対して、日本の伝統に対して、日本の宗教、神道に対しても侮辱ですね。Pride Playとか、そのようなことがあります。今日、やっと米帝国の本質が語られた気が致します」

水島「なるほど（笑）」

一同「（笑）」

モーガン「メキシコを見て下さい。何故、その国境がここまで守られていないかと言うと、それは人身売買の為ですよ」

水島「う〜ん」

モーガン「大人もそうですし、児童人身売買もやっているんです。去年、LGBTに関する本を刊行させて戴いたんですけども、その本の中でアルフレッド・キンゼイ（Alfred Kinsey）という人を結構、取り上げています。キンゼイは完全にクレージーな人で、その人がLGBTのイデオロギーを創った人間です」

水島「うん」

モーガン「未だに米国内でも崇拜されている人間で、彼のやり方としては何かって言うと、彼は、生まれて来る瞬間から、赤ちゃんと性行為をしてもいいというよりも赤ちゃんと子供と性行為をした方がいいと言う人間です。それがキンゼイです。去年、入って来たLGBTイデオロギーは、性教育とかじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「学校とかでは性教育、その性教育の意味は勿論、幼稚園の生徒は、性とは何かと全く理解が出来ていない。男と女と、どういう意味があるのかと。何故、訳も分からない子達に対して性教育をするかと言うと、それは性虐待がしたいからやっています」

水島「う〜ん」

モーガン「そういう最悪の奴らが性教育という隠れ蓑を使って子供と接近できる訳です」

水島「うーん…」

モーガン「で、そこからキンゼイ的なことが始まる」

水島「うん…」

モーガン「まあ、どういう帝国かと言うと、正にそれが目的です」

水島「うん」

モーガン「子供の純粋な心を壊す為にある訳で。社長がおっしゃったアジア、ユーラシアの価値観。私は、正にその通りだと思います」

水島「うん」

モーガン「ウクライナの最前線、ロシアとウクライナの最前線、その戦いはどういう戦いかって言うと、これはウクライナの為に争っている訳では無いです」

水島「うん」

モーガン「もう拝米保守は分かっていない。これは子供を守る為に、プーチンが今、立ち向かっています。プーチンはヒーローです。世界のヒーローですよ」

水島「うん」

モーガン「あの人が自国の子供を守っている訳です。日本は、そういうことが全く出来ていません。アメリカが、どれだけ嫌なイデオロギーを発信しているか、あの総督府がどれだけ、この日本という国に猛毒を注いでいるのかと、メディアは全く解っていない」

水島「う～ん」

モーガン「自国の子供が守りたいと思ったら、プーチンのやり方を見習いましょうと思います」

水島「そうですねえ」

モーガン「本当に、これから西洋の価値観は矛盾だと思います。自己矛盾です」

水島「う～ん」

モーガン「価値観が無いなんです。西洋価値観イコール人の国に入って伝統をぶっ壊して、もう、お前の国は私の国になったって、それが西洋価値観ですね。アジア、ユーラシアの価値観が今、台頭しているじゃないですか。それが希望です」

水島「うーん」

モーガン「プーチンは世界のヒーローだと思います。以上です」

水島「う～ん。確かに今、おっしゃって戴いたのはね、子供の大事さってというのは、渡辺恭二さんだったかなあ、『滅びしものの面影』とかいう本でね、昔、読んだんだけど、でも何度も言うようだけど、ここに来た外国人が日本でビックリしたのは、世界で、こんなに子供を可愛がる国民は居ないっていうね。子供が、こんなに幸せそうな笑顔をしている国は無いと。その時は未だ江戸ですよ。

そういう子供は貧しいけど、みんな、生き生きしている。大人もみんな可愛がっている。だから、こんな好奇心が溢れた国民は居ないってものがあつたってというのが書いていて、それが非常に印象に残っているんですけど、やっぱりねえ、我々の中で言うと、そのアジア的な、さっき言ったのは、ちょっと誤解されるけど大川周明を、ちょっと引用して、私が言ったのは、西洋の近代主義とガンジーの魂の革命という、これは別に非暴力だからとかね、根性が無いんじゃないんですよ。

必ず勝つのはアジア的な心の魂の方だと。だからチャンドラボースはインド独立軍でイギリスと戦ったというようなことで、別に非暴力じゃないんですよ。そこは、ルーサーキングさんと違うところかも分かんない。アジアの魂ってというのは、そのところでね、今、言った、もう一つは将来を見ている。我々は時間の中に生きていて、今、子供が性的な対象にすればいいみたいなね。これで絶対しないっていうね。やっぱり時間、先祖から子孫まで繋がるのは、アジア的な文化ですよ。

ところが発達する文明ばかり意識している人達は、LGBTが文明だと思っているので、もう物質的な拡大や充実みたいなばかり考える。そこのところのぶつかり合いが今、ウクライナで起きているという、まあ、具体的には戦闘やって人殺しをお互いにやっている訳だけでも、やっぱり、そういう文明と文化の戦いでもある。

或いは、ユーラシア文化と近代ヨーロッパ文化、文明の衝突が今、起きていると。実は、それはアメリカの中でも起きている。こういう時代を見据えないと、少なくとも政治家やその辺の人達は、こういうベースから今、色んな戦争が起きて、さっき言ったLGBT法とか起きているというのは、ちょっと考えていかないと、我々は単なるテクニクの問題になっちゃうと、本当に拙いなあと思っているんですよ。

保守のディープステートでこういう色んな反グローバリズムのことを分かる人達にも、では革命、みたいになっちゃうと、結局、同じになるんですよ（失笑）アジア的な魂の断念ってというのはシステムや法律や政治形式っていか政体を変えたら、みんな、幸せになれるっていう、こういう断定をしないってのが、アジア的な魂とかね、アジアの価値観じゃないかっていうねえ、ここのところが本当に我々は保守の中にも未だ随分、足りないという気があってね。中々分かって貰えないんだけど…」

及川「私も遅れていいですか、今…」

水島「ああ、是非」

及川「水島社長が言われたんですけど、そのユーラシア、あのう、アジアだけじゃなくて、それを含めたユーラシアっていう意味で、私は3か月前にロシアに行ったんですね。モスクワにあるHSEっていう大学院大学、まあ、ロシアの有名な大学ですけど、そのシンポジウムに参加する為に行ったんですね。この大学はHSEっていうんですけど、何故、有名かって言うと、カラガノフっていう有名教授が居る所なんですね」

水島「ああ、プーチンのね」

及川「プーチンのブレインですよ。セルゲイ・カラガノフ。このチャンネルでも伊藤貫先生が、よく出される。このカラガノフが、この大学を通して発信している内容っていうのが、正にユーラシアっていう思想。これと今迄の西洋中心の思想の激突なんだと」

水島「う〜ん」

及川「ということを書いていて…」

水島「うん、そうですね」

及川「単なる西とか東とか北とか南とかじゃないんだと」

水島「そうですね」

及川「そんな中で、じゃあ、今迄の西洋的なものっていうのは、カラガノフがこの五世紀の間、世界を支配して来たっていう言い方をするんですけど、この五世紀の間、色々覇権国は変わっている訳ですよ。今の覇権国はアメリカになっているかもしれないけど、要は、やっていることは全く同じで、要は支配だと」

水島「うん」

及川「今、水島社長が言われたように、一つのルールを決めて、それを他の人達に全部、やらせるっていう、まあ、共産主義の発想と一緒にですけど、要は支配して、とにかく西側西欧諸国に富を集めて、それを再配分すると」

水島「うん…」

及川「これが、この五世紀やってきたことだってカラガノフが言うんですよ。そこにあるのは、国家主権なんて要らないんだと。国家主権は、その覇権国だけにある」

水島「うん」

及川「他の国は、もう国家主権は無くてもいいんだよと」

水島「うん」

及川「誰か他の国が覇権国になって、その覇権を維持するっていうのを、この五世紀やって来たっていうんですね。だけど変わったっていうんですね。何処で変わったかって言うと、このウクライナ侵攻で」

水島「うん」

及川「この丁度2年前ぐらいになりますけど、このウクライナ侵攻っていうのを、まあ、彼らはウクライナ侵攻っていう言い方じゃなくて Special Military Operation、特別軍事作戦っていうことで、このSMO、ウクライナ戦争ですね。このウクライナ戦争をきっかけに、今だったらアメリカの覇権主義によって支配されてきて、それに言うことを聞いてきた国々が、もう、やめたんだと」

モーガン「そう」

及川「それには、みんなで一斉にやめて、もう西側のドグマには従わないと。その西側からの独立の覚悟を決めたのが、この2年間のウクライナ戦争だったっていう。そこで何が出て来たかって言うと、グローバルサウスっていう集団が出て来たっていう風に言っていました。

カラガノフは今、このグローバルサウスのことを、別の言い方で、World Majority っていう言い方をしているんですね。World Majority。つまり、このグローバルサウスの方が今、世界のマジョリティだと」

水島「うん」

及川「そのグローバルサウスのワールド・マジョリティ、イコール、グローバルサウスですけど、このリーダーになるべきなのが多分、ロシアだろうと。ただ、そのロシアのリーダーシップの在り方っていうのは今迄のアメリカのリーダーシップと違うんだと。全ての国に国家主権を認める。全ての国に国家主権を認めて全ての国の伝統とか文化とか民族性だとか宗教だとかを尊重する。お互いにリスペクトする。そこにユーラシアとしての本来の在り方があるっていう、今、言われた通りだと思いますね。

これはイデオロギーというか何て言うか思想っていうのが根本的に違うんですよね。で、私は、そのモスクワの大学のシンポジウムで、その話を聞いていて、カラガノフ先生は、その時、丁度、ちょっと体調が悪くて来られなかったんですけど、別の先生が話されたんです。でも、それを聞いていて、確かにこれは大変な問題だなと思ったのは、ワールド・マジョリティが彼らだとしたら、我々はすでにワールド・マイノリティに居るんだと」

水島「そうなんですよ…」

及川「我々は、いつの間にか、ずっとアメリカっていうのが世界の超大国で、日本とアメリカの日米同盟っていうのは、世界で最も重要な同盟なんだと言っていたのは、数年前であって、今、我々はマイノリティに居るんだっていうことを自覚していないのが問題だなと」

水島「いや、本当に、その通りでね」

及川「そういう恐ろしい感じがしました」

水島「丁度、国連総会でも去年のウクライナ支持は150か国。今回は50か国ですよ。だから100か国がウクライナ支持から離脱した。勿論、ロシア全部に賛成っていう訳じゃないけども、こういう流れの中でも今言った我々が本当に少数派になっているっていうね。つまり、そういう文明の中に、その価値観とかの中に我々が居るっていうね、そういうのをキープしているっていうのは、実は、我々独自のものが本当はあるはずですよ。あるけれども、それを未だ見出し得ていないっていうか、だから戦後が79年、続いているっていうこともあると思うんですけど。茂木さんも世界を見て、どうですか」

茂木「ちょっと及川さんに質問ですけども、セルゲイ・カラガノフの言っている事っていうのはアレクサンドル・ドゥーギンとは違うんですか」

及川「ああ、似ている」

茂木「ほぼ一緒？」

及川「ほぼ一緒だと思います」

茂木「ああ、ほぼ一緒ですか。じゃあ、良かったです」

及川「やはり両方ともプーチンのブレインですもんね」

茂木「うん、うん」

及川「ほぼ一緒だと思います」

水島「だからねえ、そういえばバイデンの周りにいるネオコンの人々の世界観や哲学や、思想と比べると、実は凄いですよ。ちょっと勉強して哲学や思想を勉強したら、こいつが本物だみたいなことが判る。それと、やっぱり、あのインタビューの中でも途中で言っていましたね。ドストエフスキーをちゃんと語れる政治家は世界の政治家の中でプーチンぐらいしか居ないんじゃないか。勿論、うちの岸田さんはドストエフスキーのドの字も、何？って言うぐらいの感じで言うんじゃないかっていうねえ」

一同「(苦笑)」

水島「本当に残念ですけどねえ。そういうような状態だろうという現実を感じますけど。基本的に、こういうエリートがね、所謂、知的なエリートとかパワー・エリートというのが今、移りつつある。経済力もパーセンテージで言うと、グローバルサウスの経済がね、現実にGDPとかを超えるようになってきている。茂木さんは今、さっき将来的に、そういう流れになっているってカラガノフは指摘していますけどね」

茂木「うん」

水島「どう思っていますか」

茂木「まあ、僕は歴史の先生なので、アメリカの西部開拓とロシアのシベリア征服っていうのは、ほぼ同時期に行われているんです」

水島「おお～」

茂木「結局、両方とも白人が先住民を征服した帝国ですよ。但し、大きな違いがあって、アメリカの西部開拓に於いて先住民は徹底的に排除するんです」

水島「そうですね」

茂木「駆逐するんです」

水島「はい」

茂木「混ぜ合わない、交わらないんです」

水島「はい」

茂木「うん。だから、これが、例えば中南米と違って、中南米は白人達、スペイン人が先住民と混ざったんですよ」

水島「そうですね」

茂木「うん。これがアメリカっていう国な訳ですね」

水島「うん」

茂木「ロシアの場合は確かに征服するんですけども、ロシア正教っていうのがあって非常に穏やかなんですよね」

水島「うん」

茂木「だから何か強制的に改宗しなかったら殺すとかいうことがないんですよ」

水島「無いですね」

茂木「だから割とシベリア先住民達は今でも独自の文化を保っているっていうことがあるので、これが正にロシアの文明ですね。僕は別にロシアの援護はしません。ロシアも帝国です」

水島「うん」

茂木「日本から領土を奪っています。ね。僕は、ウクライナを侵略しましたと思っていますよ。但し、アメリカのやって来たことに比べると、その残虐性がより穏やかかっていうか、そういうイメージは持つんですよ。そのアメリカの残虐性が何処から来るかって言うと、これは、やっぱりキリスト教の中のプロテスタンティズム、新宗教ですね。元々ピューリタンというイギリスに居た過激派がアメリカに逃げて行って創ったのが今のアメリカですから、実はモーガン先生と私は今、本をつくってしまして西洋哲学史を語る本です」

水島「うん」

茂木「今、モーガン先生が凄く面白いことをおっしゃって、ジョン・ミルトンの失樂園っていう本がありますね。『Paradise Lost』という本があって。あの本っていうのは、実は悪魔崇拝だと」

水島「うん」

茂木「悪魔って何かって言うと、つまり神を疑う心であって、あの禁断の木の実を食べて初めて理性を持って神を疑ったっていうことを、実はミルトンは称賛していると」

モーガン「はい」

茂木「この悪魔崇拝に繋がる神を否定する人間が何でも理性で出来るっていう文明を持ったピューリタン達がつくったのがアメリカっていう国ですから」

モーガン「そうです」

茂木「それが今のアメリカの病の根本的な問題だと、僕は思っています」

モーガン「はい、そうです」

水島「なるほど」

モーガン「そう、おっしゃる通りです。ピューリタンは、どちらかと言うと17世紀版タリバンです」

茂木「ああ、タリバンね」

モーガン「ピューリタンっていう宗教的な過激派が、もう自分の国に居られない、もう出て行けと追い出されて、そのピューリタンは本当に神の子として選んで戴いた民だと思って、私達は新しいイスラエルを造るとまで思って行ったことのない国、アメリカまで行って」

水島「うんうん」

モーガン「正に茂木先生がおっしゃった通り先住民を駆逐した。今のアメリカは一切、変わらない、そのピューリタンの精神が一層、強まっていた。全世界まで行って、みんなを、我々のような人にさせなければならぬ。みんな、ピューリタンにさせなければならぬ。ピューリタンのピュアって、別に純粋なという意味ではなくて、私達のイデオロギーがピュアっていうことです」

一同「うん、うん」

モーガン「何故、ピューリタンがLGBTを推し推しするかって言うと、自分がピュアだから、自分のイデオロギーが純粋で神に近い、その神の上ということですから私達は全世界まで行かなければならぬという使命感を持っていると思います。正におっしゃる通りだと思います」

水島「それは、敢えて言わせて貰うと、ポルトガルやスペインの支配している時代のね、教皇が、異教徒は、みんな殺して宜しいと」

モーガン「はい」

水島「絶滅して宜しいという教皇令っていうのをしていますよね。16世紀だったかな、ちょっと年代は、いい加減かも分からないけど。ああいうものね、私は十字軍というのはピューリタンだけに限らないっていうね」

モーガン「そう。はい」

水島「キリスト教徒というものとか、イスラム教はちょっと分からないところもあるけど、その異教徒に対しては人間と認めないというようなことがあって、そのアメリカン・インディアンとかネイティブ・アメリカンとか、オーストラリアのアボリジニとか、こういうものは異教徒としてね、人間存在として見なかったんじゃないかと。アフリカの黒人もね」

茂木「カトリックはね」

水島「うん」

茂木「そこは緩いんですよ」

水島「ああ、まだ緩いのか」

茂木「まだ緩いんです」

水島「なるほど」

茂木「だから、そんな異教徒の女と交わっちゃ駄目でしょう。でも、スペイン人はやっちゃう。アメリカ人はやらないんですよ」

水島「なるほど」

茂木「Queer っていうって」

モーガン「そうそう」

茂木「正にピューリファイするんですよ。清めちゃうんですよ。清めるって殺すっていうことですよ」

モーガン「清める。そうそう、そうそうそう、その為です」

茂木「それとね、僕、もう一つね、これをカルビニズムが徹底した国っていうのはオランダでしょ。オランダですよ。オランダが創った植民地が南アフリカっていうんですよ」

水島「ああ〜」

茂木「だから南アフリカのアパルトヘイトというのは凄まじいね」

モーガン「その通り」

茂木「正にピューリファイですよ、あれ」

モーガン「はい」

水島「まあ、そうだよ」

茂木「うん。だから世界最高の人種差別国家っていうのは南アフリカとアフリカ合衆国なんですよ」

水島「うん、うん…」

茂木「もう、これ、信仰の問題なんですよ」

水島「うん、そうなりますねえ」

モーガン「私は、アメリカ人よりもルイジアナの奴でアメリカ人は恐ろしいと思うんですよ。この北部の全世界を清めたいというフランスの植民地に生まれ育った私。その時代、勿論、アメリカですけれども。そのニューオーリンズ、ルイジアナという所は、変な話、黒人の方を見ると肌の色が違うんですよ」

水島「うん」

モーガン「隣のミシシッピーになりますと、失礼ですけれども、もう白と黒」

水島「うん」

モーガン「フランスの植民地では、みんな、混ぜているっていう感じです。スペインとポルトガルのような。そんな感じですよ。みんな、人間という感じで清めるって、私のような汚れている人間が何を清めるなのかと」

一同「(笑)」

モーガン「でもアメリカ人、ピューリタン達は全世界まで行って清めなければならないという発想で、それは完全に宗教テロですね」

水島「なるほどねえ」

モーガン「ローマ教皇は多分、もしかしたら1516年ですか、requerimiento（降伏勧告状）っていう人の国に入る前に読み上げるスペイン語ですよ。現地人に対しては、これから、あなた方の国に入ります。ちゃんとっておきましたので、ご承知下さいっていうようなね、そこから入って、もう皆殺し。今のrequerimientoは何かって言うと、それは、今の日本憲法じゃないですか。日本国憲法。つまり、ちゃんとっておいたので、あなたの国の前に入ってくるとか、またはポツダム宣言とか、あなたの国に入る前に、ちゃんとやったんですね。なので、御承知の上で、私達は、あなた方を皆殺しする」

水島「うん」

モーガン「ローマ教皇、それが茂木先生と一緒に本をさせて戴いている内容として出ているんですけども、キリスト教は何かって言うと、西洋っていう野蛮を抑える道具でもあると思います。途中から、やはり野蛮という遺伝子が強くなってキリスト教が負けちゃった訳です。

それが、さっき及川先生がおっしゃった五世紀、500年の間、キリスト教っていう姿を装っている本当の野蛮だから全世界まで奔放している訳です。キリスト教の名の下で、人の国に入って、みんな、殺して、それは、ちょっと違うんじゃないですか。キリスト教、ローマ教皇の最近の行動を見て下さい。先程、山口先生とこの話をさせて戴いたんですけどもローマ教皇は最近、LGBTを受け入れる行動をとっているじゃないですか」

水島「そうですね」

モーガン「祝福できるとかと。それは、どういう意味かって言うと、ローマ教皇とワシントンとグローバルリストが、もうセットですよ」

水島「うん」

モーガン「ローマ教皇は当然、バチカンが全世界の児童性虐待のネットワークハブです」

水島「うん」

モーガン「あのバチカンですね。全世界まで支点を張って、各国のニュースをご覧下さい。どれだけ各国で、神父が児童性虐待しているのか。もう数字が凄まじいんですよ。各国、全世界で、あのバチカンの意味は結局、それじゃないですか」

水島「うん」

モーガン「ワシントンとバチカンが最近、何故、対立しないなのか、バチカンとワシントンが何故かセットになっている。バイデンが明らかにカトリック信者って言っているんだけど、カトリックの信仰は全部を否定しているのにローマ教皇が非常に仲良くしている」

水島「うん」

モーガン「その意味は同じですよ。もうキリスト教っていうパフォーマンス、もう蒸発しました。もう完全なぜいようしゃになりました。それでウクライナ戦争が始まって、私は納得しています。これからはユーラシア、アジアの時代が始まると思います」

水島「うーん」

モーガン「もう応援しています。応援しています」

水島「いや、そういう意味で、私達がずっと昔に学んだニーチェなんかは『善悪の彼岸』というね、まあ、『神は死んだ』っていうのでも有名な言葉になっているけど」

モーガン「はい」

水島「私は、ほぼ、大体、主要なもの、そのまま解ったかどうかは別として読んでいますけど、やっぱり『善悪の彼岸』という邦訳のね、つまり、その彼岸にあるという東洋のようなものと、ちょっと近くなるんですけども、実は今言った罪とか罰とかね」

モーガン「はい」

水島「善とか悪とか、こういったものにも実は東洋にあるというね。禅だとか神道の中にも、そういうものがあると思うんですけども、そういう意味で、今、丁度、聞いて分かったのは、カソリックの緩さとかね、或いは、キツイ、これは宗派によって違うんでしょうけども、もう一つ言うと、さっき冒頭に茂木さんが言ったのかな。文化が、みんな、非常に違うんだと」

茂木「(頷く)」

水島「イスラムで言うとマレーシアもイスラム教徒だし、インドネシアもそうだし、あの砂漠の民、みんな、イスラム教徒だけど、マレーシアなんて湿気が多いところが、それでもインドネシアもそう。そうになると、じゃあ、何が故郷になっているかって言ったらメッカですよ。とにかく一生に一回、メッカに行きたいっていうね、これは国境を越えた、そういう世界宗教だけでも、こういう感覚と、またローマ教会に、みんな、行きたいとは思わない訳ですよ。それぞれの神っていうのは違う。

さっき冒頭に言ったね、みんな、本当に違うっていうことの現実を見なきゃいけないという感じがしたんですよ。それで、そういう意味で言うと、これから折り合いをつける時、移民法とか色々移民の問題を考えるとね、日本の場合、むやみに今、入れていますから中国だろうと何だろうと、こういう国なんでね、本当に何とかしなきゃいけないと思いますけど、エルドリッチさんにも聞いてみたいと思います。エルドリッチさん、じゃあ、お願いします」

エルドリッチ「はい。何について、今迄の…」

水島「宗教の寛容性とか、所謂、対立の基になる、こういうもの、今、イスラエルとパレスチナ、或いは、ウクライナとロシアも、やっぱりウクライナって言っても、これはアメリカですよ。価値観のぶつかり合いが」

エルドリッチ「うん」

水島「こういうものっていうのを今、無くすことは出来ないだろうし、折り合いをつけるという意味で言うと、日本はアメリカ側に立っていますから、今、バイデン政権側に。こういう方向を、どういう形で改めさせていくかっていうことを、これから議論をしたいと思っているんですけどね」

エルドリッチ「うん。この後半の冒頭に出ていたの、今、ユーラシアの時代に特化しているんですけども、私は、その通りだと思っています」

水島「はい」

エルドリッチ「だからこそ非常に危なくなる面がある。つまりマイノリティになっている西側」

水島「はい」

エルドリッチ「例えばアメリカとか、石になると思う。そこで、どんどん言論弾圧が強くなっている」

水島「ああ、固くなっていくってことだね、ああ、なるほど。はい」

エルドリッチ「だから、やっぱり及川さんが、この最初の話を始めて下さったんですけども、彼が最近、あれのあれがバンされて言論の自由がなくなる。民主主義もなくなる。様々な今迄、当たり前の権利、権限が、いつの間にか消えていく。

もう、どんどん、どんどん必死になる。私達の覚悟が未だ出来ていないと思う。だから、そこまでの状態になっている気がします。私は前から見ていたんですけども、こんなに早く私が信じて来た国が崩壊するとは想像もしなかった。やっぱり日本も同じ方向になっている、或いは、もう、なってしまったということが感じている。

前半か後半に出ていたと思うんですけども、もしトランプが再選された場合というプロパガンダ、批判的な議論があるということで、実は、私は今、台湾に居るんですけども、台湾の外交部も同じように、やっぱり洗脳されている。先月か先々月、彼らと激しい喧嘩になった」

水島「ああ」

エルドリッチ「物凄い喧嘩をした」

水島「(笑)」

エルドリッチ「だから応援するのは自由ですけども、まず真実に基づいて議論して欲しいということです」

水島「うんうん」

エルドリッチ「やっぱり、あまりにも思考停止、洗脳されていることを感じていた。で、だから西側が本当に危ない状態になっていると思います。はい」

水島「そうですね。台湾でどういう口論になったか聞いてみたいと思うんですけど…」

及川「今日、ちょっとPRで言わなきゃならなかったのは、さっき茂木先生とモーガンさんが今、本を作られているっていう話がありましたが、実は、エルドリッチ先生と私は今、一緒に本を作っていました…」

水島「いつ頃、出来るんですか」

及川「4月後半、ゴールデンウィークの前ぐらいに出す予定です」

水島「なるほど」

及川「さっきからエルドリッチ先生が言われている民主主義。この民主主義をテーマにした本で、要は、きっかけとしてアメリカの民主主義が終わったんだっていうことをエルドリッチ先生が言われているんですよ」

水島「なるほど」

及川「今、それが、さっき言われた、まさか、こんなに早くそうなるとは思わなかったっていうところで、そこを凄く詳しく語られていて…」

水島「なるほどね」

及川「そこには物凄い教訓があるんですよ」

水島「ああ」

及川「だから、多分、その辺のところを、ひとつに、ぐっと入れて、私が80年代にアメリカに入ってアメリカの会社に勤務していたのは80年代の後半だったんですけど、アメリカの会社に居て、その時のアメリカの民主主義を見ているんですね」

水島「うん」

及川「その時、私は日本人として初めてアメリカの民主主義、見て、凄いなあと思ったんですよ」

水島「うん」

及川「素晴らしいと思ったんですよ。こんな民主主義、これが民主主義だったら、日本には無いなって、当時、思ったんですよ」

水島「うん」

及川「しかし今は全然、違う国になっている。その辺を、この本の中に入れ込んで…」

水島「なるほどね」

及川「実は80年代の時にアメリカの民主主義を見て感動している20代の私がタイムスリップして現代にやって来て、それでエルドリッチ先生と出会うんですね（笑）」

水島「なるほど」

及川「そのタイムスリップした私がエルドリッチ先生に訊くと、いや、もうアメリカは、変わっているんだよっていう話を聞くっていうストーリーの対談本を4月に出しますので、はい」

水島「そうかあ～、浦島太郎になる訳ですね」

及川「そうです」

水島「はい。有難うございます。これは本当にアメリカが、そういう状態になっているっていうことも我々はもっと知らなきゃいけないですよ。普通のアメリカというイメージとは違うっていうことで、茂木さん、すみません。お待ちどう様でした」

茂木「あ、えーとね、何だったっけ、ああ、そうそう、そうそう。だから世界には色々な価値観があるんですよ」

水島「うん」

茂木「なので、今、僕らはね、特に、ここに集まっている方達っていうのは、今回の戦争を後ろから煽っている、要するにグローバリストは、もう退場すべきだと思っているんですけども、それと反対が、いつも正義じゃないということを言いたい訳です」

水島「まあ、そりゃ、その通りですね」

茂木「だから、何か最近ね、特にネット上でプーチンは素晴らしい、プーチン万歳、万歳という声が多くて、それ、違うだろうと、僕は思うんですけども、それはプーチンがロシアの正義ですから、日本人の正義は別にあって当然ですよ」

水島「うん」

茂木「だから岸田さんは、せっかく広島でサミットをやるんだったら、各首脳の前で、或いは欧米のメディアの前で、ここは広島ですと。ね。ここで何が起こったか知っていますかと。ね。アメリカ軍が全く無抵抗の一般市民の上で核爆弾を落としましたんですよ。ね。アメリカ人は、いや、待てと。真珠湾で先にやっただろう。いや、真珠湾は、一般市民を殺していませんから、これは戦争犯罪ですよということを日本の首相が堂々と述べ、しかし、それは過去の事で、今は日米関係は同盟関係ですからっていう風に話せばいいのに…」

水島「うん」

茂木「何も言わない」

水島「うん。言わないね」

茂木「言えない。奴隷根性」

水島「うん」

モーガン「奴隷根性」

水島「そこなんだよね」

茂木「うん」

水島「だから、今の日米関係ってというのは、それに象徴されていましたね」

茂木「うん」

水島「ね」

茂木「そう。さっき及川さんがおっしゃった通りで、日米の隷属関係ってというのは、実は、僕らの心の中にあるんですよ」

水島「うん」

茂木「うん」

水島「いや、本当にそう思いますね。我々にとってのアメリカってというのはね、やっぱり広島の時の岸田さんにとってのアメリカは、そういう感じなんでしょうね。やっぱり、その辺のところは今、我々の国の中に自覚が無くなっちゃった。それ、基準がない。それと今、茂木さんの言葉で思い出したのは、我々が戦前まで持っていた価値観というのを全て否定して、無いものみたいな、全く別の国のような、戦後79年か。前にもちょっと話しましたが、今年の産経新聞の元旦の社説。やっぱり文芸評論家の方が、もう79年も経ったら、これも伝統と言えるだろうというようなことを書いているけど、こいつ本当に文芸評論家かなあと思ったんだけど、敢えて名前は言いません、前に言ったけど。

こういう感覚の伝統とか文化とか、こういうものを捉えている人達が、やっぱり、先程、言ったウクライナの問題を見誤るとかね、色々なことをするんだろうなと。と言うのは、元から何も無ければ、本当に判断、出来ないですよ。基準が無いというね。正しい、正しくないというのも、それと、もう一つは、今回の場合、茂木さんのね、私が、さっき『善悪の彼岸』って言ったけど…」

茂木「(頷く)」

水島「正義とか不正義ってというのは相手側にとっては、例えばロシア側にとってはロシアの正義だし、ウクライナって言うかアメリカにとってはアメリカの正義だしね。だから、こういう風になるけれども、我々が今、これから目指さなきゃいけないのは、それこそ『善悪の彼岸』と言うか、善悪を超えた

ものの中っていうものを、私は東洋の魂って言うか、そういう哲学というか、そういうもので考えるんですけど、そういうものを超えたものが今、世界中の何処にも打ち出されていない。

この間、エマニュエル・トッドの『西洋の敗北』だったかな。これのダイジェスト版を、チャンネル桜の仲間が皆さんに文字おこしをして会員に送ったんですけども、やっぱり、そこまでは、みんな、認めるんですよ。だけど、その次に何があるかって言うとね、未だ語る事が出来ない。だから、やっぱり政治家も駄目だし、役人も駄目だって言うけど、彼らにそれを急に求めても、室伏さん、中々難しいよね。あの程度の人達ですから」

室伏「まあ、だから、逆に分からないですけど前提条件が揃ってないっていうか、端的に申し上げて政治家の質が物凄く落ちているじゃないですか」

水島「うん」

室伏「基本的な価値観とかね、基本的な哲学とか、それすら無いと。まあ、ハッキリ言うとバッヂを付けたいだけ。国会議員と名乗りたいだけという方ばかりでしょ」

水島「はい」

室伏「だから彼らの主張とか、まあ、政策的って言うていいのかは別として、敢えて政策という言葉を使いますが、その中身というのがオポチュニストと。その場凌ぎになってしまうということがある訳ですよ。だから、そこから本当は上げていかないと、クライテリオンも何もないんですけど、残念ながら、今、そんな状態になっていると思います」

水島「そうですね」

室伏「何故、そうなっているかって言うと、やっぱり、まあ、これは堂々巡りになるんですけど、やっぱり国民自体のレベルも下がっちゃっているし、役人も下がっていますけど、国民の意識も。で、特に、今ね、僕、これ、凄い、あもう、問題と思っているのは、今の若者っていうのが目先の利益を追求するように、あもう、凄く追い立てられていると。だから国家を考えよう天下国家を考えようということより、とにかく目先の金だと」

水島「うん、うん」

室伏「勿論、待遇の問題とか色々ありますけどね。例えば役人よりも外資系企業に行きましょうとか、外資系コンサルに行きましょう」

水島「うん」

室伏「とにかく金だと。更に、そこに追い打ちをかけるように金融資産運用立国だという何かよく解らないことを言って、だって、今や高校生でも株式投資とかやって、お小遣いを稼ぐ訳じゃないですか。お小遣いって言ったって、僕らの頃のお小遣いどころじゃないですからね。その10倍とか20倍、稼ぐ訳じゃないですか。そうしたら色んな事を考えようとか、天下国家を考える、社会のことを考えよう。あとは一生懸命、修行して、教を乞うて、何かを習得しようとか、僕が危惧しているのは、物造りの現場っていうのは、どんどん無くなって来るだろうと」

水島「うん」

室伏「結局、修行へ行って師匠から、始めは雑巾がけから始まって、飯炊きから始まってということ、今の子達に言った瞬間に、意味、解りませんって」

水島「うん」

室伏「ちゃんと教えて下さいって、そうなるじゃないですか。でも、それは、こうなんだよって諭すことすら出来ない。つまり諭されて、ああ、そうか、師匠は、そういうことを考えてくれるんだっていう風なことを考える下地すら無い訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「だから、今の政治家だけじゃなくて子供達も、全員とは言わないですけど、だから、もうエルドリッチさんのさっきの話じゃないですけど、本当に国の崩壊が、これは、もうねえ、年齢、老若男女を問わず、起こっちゃっているという、ちょっと悲観的な話になっちゃいますけど、ただ、この実態を分らないと。

だから、その一環として、例えばLGBTやってしまったりとか、何とかハラスメントの話があったりとか、要するにハラスメントとかLGBTとか、ああいうものって全て日本を壊す為の道具に過ぎないじゃないですか」

水島「うん」

室伏「実際、壊れてきていますよね。僕が今日、ここのスタジオに来る迄でも、ほんとに、こいつら大丈夫かと。見た目は20代ですけど、行動パターンは幼稚園児ですよ。あ、ごめんなさい。幼稚園児なんて言っちゃいけない、赤ちゃんですよ、ほんとに」

水島「うん、うん」

室伏「いや、でも、それが増えている。と言うことは、彼ら、彼女らっていうのは周りの事を考えたり出来ない訳ですから、そうすると、日本のおもてなしとか思いやりとか、そういうことが無くなると、どうなりますかって言ったら、其処ら中で喧嘩だ、何だかんだ、になりますよ。これは、それこそアメリカの現状じゃないですか」

水島「だから、先日、天長節、天皇誕生日があった時、雨が降っていてね、あそこの皇居の一般参賀に出ていた方が、みんな、傘をさしていたんだけど、うちの仲間が行ってね、陛下がお出ましになった時、傘をどうするんだろうと思ったら、いつの間にか全部、宮内庁で何かアナウンスがあったのって聞いたら無かったって。

自然に、みんなが傘を閉じて、まあ、濡れる訳ですけどもね。小さな日の丸を持ったりして、それから言う事を聞くんですよ。私は、万歳をしてもいいと思うんだけど、万歳しないで下さいっていうアナウンスには時々、変わったって言うか、まあ、私みたいな奴がやっていたけど、殆ど、みんな、しなかった。

本当にねえ、お出ましの時だけは、雨に濡れても、その傘を閉じて、ちゃんとやったっていうのを見ると、未だ少しね、少し希望があるなど。あれで、皇族の皆さんがお出ましになった時も全員、傘をさしていたら、これは、もうお終いだと思う。だから、その人も、心配だったと言っていましたけどね。でも凄く嬉しかったっていうことがありました。

でも言葉がね、日本の若い子供達の言葉のメインの使う言葉は200語ぐらいしかないっていうね。本当に言葉自体が日本の滅びの象徴になっているって思います。それから、これは悪口に聞こえちゃうけども、中国が嫌いだからって言ってね、漢文教育を無くせって言ったおじさんが一人、居ましたけど、こういう感覚で、保守だと思っている形は、本当に拙いと思う。我々の知性が、どれだけ今、落ちているかっていうようなことを感じるんですけども、山口さん、出番でございますけども」

山口「そうですね、やっぱり室伏先生がおっしゃるように、じゃあ、日本は、太平洋戦争のあとGHQというね、実はアメリカの占領下にあって、サンフランシスコ講和条約で、一応、独立国に戻ったとされているものの実態として、システムとして軍事的にも、或いは経済的にも、行政的にも、アメリカに隷属している」

水島「そうです」

山口「これは岸田文雄のせいではなくてシステムとして、そういう風になっちゃっている部分があった訳ですね」

水島「そうですね」

山口「ただ、岸田文雄の罪というのは、モーガン先生、室伏先生が言うように、それを正に唯々諾々と自分から喜んで奴隷となっている。この問題点は、今迄の日本の首相と比較して最も罪深いのが岸田文雄だと、私は断定していますね」

水島「まあ、そうですね」

山口「ただ、これは日本人が岸田は無能で屑だって言うことについて、私は譲らないけれども、あの人が、このバイデン政権下で首相になってしまったという不運を除いて言えば、実はアメリカは未だに日本を占領し、支配するシステムを維持しているっていうことについては、しっかり認識しなきゃいけない」

水島「そうですね」

山口「一番解り易いのは、例えば、今、ポスト岸田って誰ですかって、名前が挙がる人、上川陽子、河野太郎、小泉進次郎、福田達夫。ここら辺が今、ライジング・スタートとして日本のメディアが書く人達です。川上陽子はハーバード、ケネディ・スクールです」

水島「うん」

山口「河野太郎はジョージタウン大学で福田達夫はジョン・ホプキンス大学です。小泉進次郎は、嘘か本当かコロンビア大学です」

一同「(笑)」

山口「この会議の冒頭で、アメリカがロシアに手を突っ込んだ。民主主義とか反独裁とかを掲げたナワリヌイを反エリツィン、反プーチンの旗手として持ち上げた、この時、彼はイエール大学の奨学生だった。それはCIAやアメリカのお金によって、アメリカに都合のいい民主主義プロパガンダを背負ったからですね」

水島「うん」

山口「ただ、彼は所詮、反体制だったじゃないですか」

水島「うんうん、うん」

山口「ところが日本の場合は、次の総理と言われる人が上川、河野太郎、福田達夫、小泉進次郎。全員がアメリカの日本支配、ジャパン・ハンドラーの手先となっている人が、次々と次の総理として持ち上げられ続けてきた」

水島「うん」

山口「中曽根康弘もそうです」

水島「うん」

山口「小泉純一郎もそうです」

水島「うん、そうです」

山口「この人達はアメリカに従順だという理由で5年以上の政権を維持した」

水島「はい」

山口「そういう意味ではアメリカの日本支配というのが、実は政権与党の自民党に深く手を突っ込んでいて、そこにメディアが加担して、日本人の目をくらましてアメリカに従順なリーダーを次々と生み出す。これはシステム化しているっていうことについては、これは日本人が無能で馬鹿で世界が判らない

からではなくて、サンフランシスコ講和条約のあと日本を軍事的、政治的に占領し続けるんだというシステムの中で、日米合同委員会があって、財務省があって、東京地検特捜部があって、そして自民党がある」

水島「うん」

山口「これがアメリカのソフト面に於ける日本占領の継続の証拠な訳ですね」

水島「そうですね」

山口「だとすれば、まず最大の敵はメディアだっていうことになってくる」

水島「うん」

山口「訳の分かんない上川陽子とか小池百合子とか河野太郎とか福田達夫が次の総理になり兼ねない。この状態は、じゃあ、上川陽子って、何故、今、ポスト岸田で名前が出て来たんですか」

水島「急に出たね」

山口「急に出て来た。この人はハーバード・ケネディ・スクールのあとマックス・ボークス (Max Baucus) という、アメリカ人のお二人はご存じの通り、民主党の中の国際金融資本と最も近いとされる人の事務所スタッフをやっていたのが上川陽子ですよ。英語で直接、ウクライナ支援をやれと。そのまま電話を取れるのが上川陽子な訳ですね。日本の国益をアメリカに売り飛ばす、その為の種を若い内の自民党の政治家にアメリカが投資し続けて来ているということ。私達は、そこに騙されないっていうところからスタートすれば、今、オランダやハンガリーやドイツやフランスやイタリアやアルゼンチンで起きているように日本人の為の日本の政治家、先程、室伏先生が言った魂を持って真の独立国になる為に政治をやるんだという人を、きちんと選んで、その為にはメディアは期待できない。

だから、こういう番組と、こういう世界観、歴史観を持った人達の意見を出来るだけ多くの人に知って戴きたいし、罷り間違っても上川陽子や河野太郎や福田達夫や小泉進次郎を総理にしてはいけないという強い抵抗をしていかない限り、岸田より悪い総理って中々、想像できませんけども」

一同「(笑)」

山口「ネオ岸田みたいなのが次々と生まれる。そういうリスクがあるという問題意識をね、今日、共有できれば、お邪魔してよかったなと思いますね」

水島「そうですね。前例としては、本当に岸田さんはそういう人ですね。皆さん、昔から我々が知っているのはフルブライト奨学生とかね、ずうっと、やって来ました。チャンネル桜のキャスターにも招待があって、全額、飛行機代から滞在費から何から負担してくれて、それから小遣いもくれるというね。私に相談があったから行った方がいいんですかねと言ったから、いや、行ってみたらって言って、1か月ぐらいだったかな、それで、やっぱり色々こんなアメリカがいいんだ、こうだって色々教えてくれるそうです。でも、いい勉強になったと思いますよ。

そのまま溶けこんじゃったら、そうなったら困るけど、そういう人も居ましたよ。やっぱり我々の教育は、じゃあ、中国人が10万人も来て、毎月15万ずつ貰っているっていうのは、そういう洗脳をやっているのかって言ったらやっていないですからね。金だけ払っているだけっていう状態ですけども、今言ったこの問題。

それとね、もう一つ、今日、お聞きしたいと思ったのは、我々のシステムの中にある選挙制度について言いたいと思っているんですよ。つまり小沢一郎がやった小選挙区になってから100%、まあ、この間の選挙でも参政党は頑張って相当、180万票ぐらいだったのかな。それでも1議席ですよ。それで何も出来ない。大枚のお金を使わなきゃいけない。選挙区に立てるのは一人、300万、参議院の比例区とか全国区だったら600万とかね。我々は一回だけやってみて大失敗してガックリ来ましたが(苦笑)つまり無理です。せいぜいガス抜きの一か二人を出して民主主義を装うだけであって、本当

に、私が今、必要だと思っているのは、今日、皆さんのお話も聞いて、特にそう思ったのは、本当に国民のパワーって言うか力でね、岸田は駄目で、じゃあ、次の奴も碌でもないだろうと。

でも一番、大事なのは何かって言ったら、この岸田を国民の力で、ぶっ倒すっていうことでね、そうすれば次になる奴も、いざとなったら、やられるぞと。アメリカも少なくとも政治家や役人は手懐けられても国民はそうもいかないって感じのところへ持って行かないと、本当に日本の戦後の体制を変えていくっていうのは中々難しいんじゃないかと。最近、特に、私はずーっと20年間、こういうことをやってきたので、この選挙制度は100%、中選挙区に替えない限り普通の選挙で真面目に政権交代をさせるっていうことは、もう無理ですよ。ええ。馬鹿ばかり、仕事をやらないで、ぼんやりしてれば比例区は通るし、二人に一人しか出ないですから、本当に切磋琢磨もない。こういう状態の中で選挙制度も、我々の国は、実は、もう民主主義じゃないんだっていうね。

だから、5割、行かない人が今、日本に増えていますが、それも当然じゃないかと思ってね。庶民感覚で行ったら、実際は自分の票が活かないんだっていうことをよく分かっているっていうところもあるんじゃないかと。だから、そういう意味では、国民のパワーって言うか、うねりを作って国会を10万人で取り囲んで、岸田を引き摺り降ろすみたいなことぐらい出来なければ、本当に拙いと思いますね。

本当に戦争も起こる可能性があると思うし、私は、今日、そういう感じがしましたけども、時間が無いので皆さんに一言ずつ戴いて終えたいと思います。今日は、皆さんから、本音をお話し戴いて大変、嬉しかったです。じゃあ、まず、及川さんから」

及川「はい。日米関係っていうことで、やっぱり上下関係と言うか隷属関係というか、これが、やっぱり何か、ずっと我々の中に諦めムードみたいなのがあって、どうしたらいいのかっていうところは、本当に、私もずっと考えて続けているところで、今、社長が言われた選挙ですが、私も何回、出たのかなあ。7回ぐらい出ているんじゃないかと思うんですけど（苦笑）0勝7敗ぐらいですよ。確かに本当に難しかったというのは実感している訳ですけど」

水島「小さい政党では無理ですよええ」

及川「ただ、ちょっと試してみたいなあと思うことがあるんですが、先週末かなアメリカでシーパックっていう保守団体のイベントがあって、そこに毎回、トランプさんが来るんですけど、その時にアルゼンチンの大統領のミレーさん」

水島「ああ、居ましたねえ」

及川「ミレー大統領が来たんですよ」

水島「はい」

及川「楽屋でと言うか舞台の裏側で、初めて会うんですよ」

水島「うん」

及川「会ってお互いが凄く喜んでいるっていうのはネット上で出ていたんですけど」

水島「うんうん」

及川「その時に二人が初めて会っているんだけど、非常に意気投合して、トランプさんが『MAGA』っていうけど、それはアルゼンチンも『MAGA』だねと。Make Argentina Great againだから、そっちも『MAGA』だっていう話をしていて、何となく、その光景を見て国と国、というよりも、もうちょっと違うレベル、完全に反グローバリズムと言うか、反グローバリズムとして一致しているところがあるんだろうなと」

水島「うん」

及川「もう、私はアメリカと日本が国と国、というよりもアメリカの中の反グローバリストと日本の中の反グローバリストだとか、まあ、アルゼンチンの場合は完全にそんな感じ」

水島「うんうん」

及川「ミレーさんは、どっちかと言うとリバタリアンだと思うんですけど」

水島「うんうん」

及川「今、世界各地で希望があるとしたら、さっき山口さんが言われたように、色んな国から出て来ているんですね。アルゼンチンだけじゃなくてハンガリーもそうだし。ヨーロッパの色んな国から『MAGA』的な、トランプ的な政党だったり、政治家だったりっていうのが、ちょっとずつ出て来ている。その何か横の繋がりとか共闘って言うか、何かそういう流れが、もし作れたら…」

水島「それは、いいことですね」

及川「だから、何か、ひとつの巨大な悪に対して闘える道があるのかなあっていうのを考えていて、まあ、社長とも、そんな話をしていましたけど、今年は何かねえ、そういう流れの何かきっかけでも作るべきじゃないかなと」

水島「いや、だからねえ、例えば、さっきも言ったじゃないですか。まず、とにかく岸田を引き摺り降ろそうよと言ったら、もうねえ、左から右まで、保守からあれ迄、とにかく岸田を降ろした方がいいと思う奴、幸せを国民に齎そうと思う人は、みんな集まれでね、一回、全部、引き摺り降ろしてみたら選挙をした方がいいと思いますね。そのぐらいやらないと、あまりねえ、ああだこうだ言っている以上に、それで、そういう人達が今、及川さんと、この間、話したのかな。ねえ」

及川「そうですね」

水島「フランスの連合とかドイツの為の選択肢とかね、こういう、所謂、ナショナリスト政党というのが国際連合じゃないけども、こういう形で反グローバリズムの企みを一個、一個、潰していくっていうか、こういうような形の連合を創っていくね、及川さんは英語も出来るし、あれだから、ちょっと頑張っていて、という話をしたんですよ。でも、そういう流れを本当に大きく日本の中からも、我々の八紘一宇っていうのも、そういうところがあるんでね。

そういうことまで考えてやったら、どうかなあというね、特にアメリカが分裂するっていう噂がありますからねえ。はい。有難うございます。では、茂木さん、お願いします」

茂木「グローバリストっていうのは歴史を否定します。過去は遅れているというね、誤っていた。それを乗り越えて、今、最高の水準に来たと。今から20年ぐらい前にフランス・フクヤマっていう奴が『歴史の終わり』という、とんでもない本を書いたんですけども、あれは嘘でした」

水島「はいはい。嘘でしたね」

茂木「今、起こっていることは歴史の反逆です」

水島「あれ嘘だったねえ。うん」

茂木「歴史の反逆。それぞれの民族、国家は歴史を持っているんです。その歴史観を持った国、民族だけが、これから生き残ると思っているので、この間のタッカー・カールソンのプーチン、インタビューを見ていて、ああ、プーチンと酒飲みたいと思った（笑）」

一同「（笑）」

茂木「多分、彼と話が通じる」

水島「うん。あまりバイデンさんとは飲みたくないですね（笑）」

茂木「ないない、ないない」

一同「(笑)」

茂木「そういう話の分かる、例えば、ロシアと日本がもう一回、歴史を見直す。あの領土問題は何故、起こったのかとか、全部、ちゃんとオープンにした話をする。それがあつたら、かなり面白いと思うんですね」

水島「そうだねえ。う～ん。是非、それも茂木さんから頑張ってやって貰おうと」

茂木「うん。誰か通訳で(笑)」

水島「やれるやつは、みんな、やりましょうよ」

茂木「そうですね」

水島「はい、有難うございます。山口さん、じゃあ、お願いします」

山口「やっぱり、その世界では、例えば、11月5日は、アメリカの大統領選が最高峰というか、最終戦争という言い方も言い過ぎではないという気がしていますが…」

水島「ああ、なるほどねえ」

山口「それ以外に、皆さん、おっしゃるように、オランダ、ハンガリー、ドイツ、フランス、イタリア、アルゼンチン、えー、オランダは、もうヘルト・ウィルダースというね」

水島「うん」

山口「もう移民絶対反対。イスラム教自体を否定するというね」

水島「スウェーデンも、そうになりましたね」

山口「スウェーデンも、そう。要するに、西洋、西欧という社会で、そういうグローバリズム、或いは、超国家的に私達の国を蹂躪する者に対する戦うというのがムーブメントとして起きている訳ですね」

水島「うん」

山口「ところが、やっぱり室伏先生が言うように、日本で中々、それが政治勢力として、結集できないのは、私達が遅れた暗い馬鹿な民族だからではなくて非常に巧妙なシステムを、アメリカの、特に民主党政権側、それこそバイデン政権に至るまで、つくられているという、まず、日本の特種性」

水島「うん」

山口「GHQ以降、実はGHQの戦略は未だ続いているんだと言う」

水島「そうですね」

山口「ある種の割り切り。今日はそれをかなりの次元で皆さんと共有出来て非常に良かったなあと思います。まず、この基本認識を共有しない限り、また、岸田みたいなのが出て来て」

水島「そうですね」

山口「アメリカの言うなりの総理が日本の国富を外にバラ撒き続けることは、もう間違いのないことなので、今年、何処かで解散総選挙があるでしょう。そして拉致問題を捨て、ウクライナに巨額な支援をして、ホワイトハウスから国賓で呼ばれて議会で演説をして、それで選挙に勝てると思っている馬鹿な岸田を…」

水島「うん(笑)」

山口「何とか出来るだけ早く総理官邸から追い出す」

水島「そうですね」

山口「それが第一歩になるだろうと」

水島「そうですねえ」

山口「そんな風に思っています」

水島「はい」

山口「本当に、今日は勉強になりました。有難うございます」

水島「有難うございます」

一同「(礼)」

水島「室伏さん、お願いします」

室伏「はい。今日は、色んなお話を聞いて本当に非常に意義があったと思います。先程の上川とか河野とか、福田とか阿呆次郎とか出ていましたけど、実は、そういう形で洗脳されているのっていうのが政治家だけじゃなくて、官僚も、そしてビジネス業界もそうですね。どうわが洗脳世代という風な言い方をしていますけども、そういう連中がアメリカに留学に行って洗脳されて、アメリカは素晴らしいとかアメリカの制度にすれば日本は成長するんだと言って90年代以降、壊してきたのが、この30年間の日本の停滞ですね。

僕の本『ニッポン没落のカラクリ』の中にも、それは書いてありますけども、要は未だにアメリカに行けばいいとか、アメリカのやり方をすればいいとかね、まあ、『MBA』とかね。MBAの訳は何ですかって言われたら、僕は『マジで馬鹿、阿呆』って言っているんですけど…」

一同「(笑)」

室伏「でも本当にそうじゃないですか。だって短期的に財務を見ることしか出来ない訳ですからイノベーションもへったくれも無いでしょう。だって、あんなことをやったってイノベーションがどんどん起きなくなってアメリカで実証されて、もうやめようってなっているのに未だに行く訳でしょう。だから本当に『マジで馬鹿、阿呆』な訳です」

一同「(笑)」

モーガン「おっしゃる通りで(笑)」

室伏「はい。でも、そういう連中は未だ日本で跋扈しているし、インフルエンサーとか偉そうなことを言っている訳じゃないですか」

モーガン「はい」

室伏「でもね、山口さんのおっしゃった話に行ってしまうんですけど、まず、そういう連中が、これだけ居るんだと。そういう連中でも、ハッキリ言って、そういう連中は、『マジで馬鹿、阿呆』なんだということを認識するところからやらないと、何かインフルエンサーだ、再生回数も凄いいし、フォロワーも凄いいから凄いい事を言っているみたいだね、子供達が騙されちゃうし、多くの人って騙されちゃうじゃないですか」

水島「そうですね」

室伏「だから、大手メディアから追い出されても、あのう、ネットメディアの中でもね、まあ、誰とは言いませんけど、何か変な発言をして、それっぽいことを言う人が居るじゃないですか。その人、今でもネットメディアで聞かれたりとか発言したりする機会がある訳ですよ。でも、そういう奴らは、だか

らこそ、こうなっているんだっていうことを、まず認識するっていうことが、要は現状認識から始めないと、何も始まらないですから、まず、それが重要だということと…」

水島「はい、そうですね」

室伏「あと、今年は世界的な選挙イヤーですねと」

水島「はい」

室伏「及川さんがおっしゃったように、まあ、はっきり言えば国民主義政党ですね。日本だと、やたらと極右とありますけど、極右じゃなくて、単純に国民の事、国の事を考えているだけの人達ですから、そういう国民主義政党が特に欧州議会選挙もありますが恐らく今のところ、所謂、右と言われている勢力と左と言われている勢力が大体、拮抗していますけど、恐らく、私は右と言われている国民主義が多数になるでしょうねと」

水島「うん」

室伏「それは、もうヨーロッパの色んな、あのう、国政選挙みたいなことで明らかですから」

水島「うん」

室伏「これはね、やっぱり、ヨーロッパ自体も変わっていくということになるでしょうねと」

水島「うん」

室伏「これは、やっぱり日本としては見逃しちゃいけないし、どうも未だに、それがよく解らない人が多いので、そこは、ちゃんと注視しなきゃいけないっていうこともあるし、僕はね、こういう機会を通じて何回も何回も繰り返し言っていきたいと思ってます」

水島「そうですね」

室伏「だから、皆さんも宜しくお願い致しますということと、あと、もう一つ非常に不穏な動きとしてグローバル・フォーラムがありますよね」

モーガン「うん」

室伏「先程、茂木さんがグローバリストは歴史を否定するとおっしゃいましたけど、歴史どころか文化や色んなものを否定して、彼らっていうのは完全に同じ価値観でリスクリングというのも出しているのって、あれもグローバル・フォーラムですね。何かロジック・ツリーみたいなのをピーター・ルイチが作っていますけど、そういう形で全てを平準化していこうということで、そこから、こぼれ落ちた人間は、要するにもう生きる価値も無いとすることにしようとしているのがグローバル・フォーラムですけど、実際に言ったかどうかは別としてデンマーク人のアーティストと言われる人がグローバリズムに対する反論を、その場で演説をしたという動画がありましたよ。私は、それを拡散しました」

水島「うん」

室伏「実際、言ったかどうか分かりません。ただ、少なくともグローバル・フォーラムの欺瞞に対して抗議をするという人達は着実に出てくる訳ですから」

水島「うん、いいですね」

室伏「ところが日本は何かグローバル・フォーラムの東京事務所を今、デカくしていますからね。六本木ヒルズの49階にありますけど、だから、僕は最後に、このグローバル・フォーラムの餌食になるのは、日本じゃないかということを懸念していますけど、実は、このクラッシュラブラのやっている不屈きな動き自体、もう徐々に徐々にぶっ壊されつつあるというか否定されつつあるんですよと。」

これも、やっぱり、僕らは認識をして、それを広めていかなきゃいけないな。そうしないとグローバル・フォーラムが言ったことは絶対だ、みたいなことを考えている人が未だ居るじゃないですか。20代、30代、40代とかでね。やっぱり、これは否定していくってことをやる。だから繰り返しますが、現状認識と、それから本当の動きっていうことを、やっぱり皆さんに知って貰えるようにしていくってことと、もう一つは、そのグローバルが素晴らしいって話ですが、特にグローバル・フォーラムの動きというのは、もう限界に来ている」

水島「そうですね」

室伏「逆回転が起きているんですよと。これも是非、皆さん、認識をして生きていって載きたいなと思います」

水島「はい、有難うございます。ジェyson・モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。今日は本当に勉強になりました。有難うございます。先程、崩壊って言葉が出たんですけども、私は国が崩壊しているというよりも、国が取り壊されていると思います。誰かが態とこの国を取り壊していると思います。前回も言わせて戴いたんですけども、日本という国は名誉白人支配です。フランス・ファロンという人、私は、大好きですけども、名誉白人とはどういう意味なのか。フランス・ファロンの本を読んで戴いて、日本は外務省が無いじゃないですか。みんな、プリンケンの補佐官に過ぎないじゃないですか、日本が本当は支店」

水島「うん」

モーガン「ワシントンの日本支店、外務省が無いと思います。難民の話、移民の話ですけども、私は強制送還した方がいいと思いますよ。追い出せばいいです。難民というのは欧米の帝国主義が失敗で終わった結果として人々が逃げる。何故、日本がその後片付けしなければならないのかと。全く納得できない訳です。追い出せばいいのです。

今年の選挙ですけども、選挙になるかどうか、次のナワリヌイさん、次のナワリヌイはトランプじゃないですかと、私は思います。未だに西洋の腹黒さ、まあ、日本の方々は、解っていないと思う。どれだけ墮落している連中なのかと分かっていない気がします。

社長がおっしゃった近い将来、どうなるかというご質問があったと思うんですけども、アメリカの場合は離脱するしかないと思います。州毎で、離脱するしかないと思います。ある意味、日本では離脱が出来ると思います。それは、この都会から離れて地方に帰って腐敗した都会から離れて、本当の日本文化を思い出すことはいいなと思います。

最後に希望です。茂木先生もおっしゃったんですけども、ピューリタンの奴らが現地人を駆逐したと。心理的、精神的に死んでいる人が見たいと思ったらアメリカの収容所、リザベーションというインディアンが集まっている居留地、リザベーションですね」

茂木「保留区」

モーガン「保留区に行ってみて下さい。もう自分の文化が殺された」

水島「うん」

モーガン「自分がただの生きている幽霊みたいな状態になって精神的に解体された、精神的に死んでいる人々の目が死んでいるような、もう心が抜いちゃったみたいな」

水島「うん」

モーガン「本当に失礼な話で恐縮ですけども、私が日本に来て、そのような感じがしました」

水島「うん」

モーガン「この素晴らしい国民が精神的に殺された」

水島「うん」

モーガン「殺戮された。自分の素晴らしさは忘れちゃったような何故か、あの気持ち悪い連中、西洋ばかりを真似しようとしていて、もったいない」

水島「うん」

モーガン「日本人が西洋を真似すれば本当にもったいないです。それで希望です。アメリカン・インディアンですけれどもアパッチかと思うんですが、昔、通過儀式っていうんですか通過儀礼ですか、rite of passage、例えば初生理する女性が、つまり子供から大人になったっていう境を認識する訳。昔、白人が、アメリカでは、それは嫌だからやめてくれと。最近、そのようなことはやめてくれ。キリスト教に改宗して下さいと。もう強いてね。

最近、敢えて、それをやるようになったんですよ。アパッチがこうやって昔の様に3日間ぐらいかけていると思うんですけど、アパッチみたいな服装をして、敢えて自分の言葉を使って、敢えて自分の儀礼をやる訳です。文化は死なない。文化は冬眠するだけ」

水島「うん」

モーガン「でも死なない。根っこが物凄く強い。この日本では、私が毎日、文化が未だ生に生き残っていることを見ているんですよ」

水島「うん」

モーガン「日本人は本当に心がいい人が多いですよ。日本の中から文化が蘇るんですよ。もし、やろうとすれば自然で蘇る。私は本当に希望を持っている訳です。以上です」

水島「はい。有難うございます。では、エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい。有難うございました。先程、山口さんのお話とか及川さんのお話、そして室伏さんの話の延長ですけども、政治家が特に次期総理大臣と言われている人達のアメリカ教育、アメリカの洗脳。室伏さんがおっしゃっていただけではなく、経済界というところで、更に言えば、やっぱり、多くの大学の先生達、まあ、メディアの人達が、やっぱりワシントン支局、ニューヨークを懂れている。そこで非常に洗脳されていることがあるという風に感じている。

そういう意味で、例えば、今日の番組を観た視聴者の皆さん、或いは、これからネットで観る人達が、もし、このような話を理解できなければ、それを今迄、何を信じて来たのか。何故、それを信じて来たのかを、やっぱり自問して欲しいなあという風に思って、考え直して欲しいということです。あと、ちょっと若い人達に、あまり何も考えていないというお話があったんですけども、モーガン先生がおっしゃっていた文化の根っこが強いから蘇られる可能性があるんですけども、私が付き合っている若い人達は、実は愛国心が強くて、そして歴史、伝統、文化を非常に大切にしている。

これは、私から伝えたのではなく、逆に、彼らが自ら伝えていることです。先日、沖縄の方に行って来たんですけども、沖縄で交流がある20代の男の人が物凄く沖縄の歴史、そして文化に猛勉強している。やっぱり、それを見て、非常に嬉しくなるということで、だから、やはり私達が彼らに頼られる大人にならないといけないということが、いつも、やっぱり自覚させられているんですけども、やっぱり世界の動きをちゃんと見て、自分の国の位置づけを常に軌道修正しないとイケない時期が来ているという風に思っています。

今迄、ずう〜っと同じ政党、同じ人に入れるかどうかを、今年こそ真剣に考え直す必要があるという風に思っています。以上です」

水島「はい。有難うございました。今日は『日米関係の現在と未来』ということが題名だった訳ですけど、やっぱり、日本はどんなもんだというようなことになったと思います。そういう意味で、もう一つ敢えて言っておきますと、これは三島由紀夫さんが書いた『文化防衛論』っていうのがあるんですけ

ど、実は、私の専門は、ドイツの作家のトーマス・マンですけど、この『非政治的人間の考察』っていう第一次世界大戦のドイツと英仏の文明。ドイツ文化と英仏文明の戦いだというような形で第一次世界大戦を捉えていたんですね。

そういう意味で言うと、文明というのは発達していく。だけど文化というのはずう～っと輝きの連続性が、ずっとあるけれども、連続性として、それが繋がっている。この違いというものは、やっぱり、さっき言ったように、いい悪いとか何かっていうのは、どうしても文明論の中の思想の一環の色々な理念や、そういう中に出るけれども、文化というのは、やっぱり我々がいつも感じること、お正月になったら何故かお天道様に拍手を打ったり、靖国神社へ行ったり、明治神宮へ行ったり、御大師様に行ったりとか、一体、何だか分かんないけど、みんな、とにかく、我々以外のものに対する敬意を表するみたいなね、こういった感覚というものは本当に何だろうっていうのを、今、エルドリッチさんが最後に、もう一回、自問してみる必要があるっていうことでした。我々も、もう一回、素直に考えてみたいと思いました。日本はまだまだ諦める訳にはいかないと思います。ということで、今日は以上です。有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****